

魔人の息子

狩る雄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悲劇の果てに『魔人』と化した色黒の男に拾われた、前世の記憶を持つ少年ジン。復讐と愉悦だけが残った『魔人』に義息子として育てられたジンは、前世の記憶もあり魔法の技術を急速的に吸収し、自らも魔法を開発出来るまでに成長した。

そしていつしか、彼も魔に吞まれていった。

目次

第1話	仮初めの親子	1
第2話	人工魔人化実験	8
第3話	検分	15
第4話	知識チート	20
第5話	復讐	27
第6話	魔人らしさ、人間らしさ	32
第7話	魔人は悪者？	38
第8話	闇から這い出そうと	46
第9話	光	53
第10話	家族の1人として	59
第11話	問い	65
第12話	ステップバイステップ	72
第1話	チートでバグで最強の魔法使いの王	79

第1話 仮初めの親子

奏でる曲は、『G線上のアリア』。

クラシックに属する名曲で、J. S. バッハの『アリア』を編曲したもの。ヴァイオリンのG線のみで演奏できるこの編曲は、テンポがゆったりと優雅な雰囲気を持つ。「緊張」と「緩和」、「切なさ」と「優しさ」、「急」と「緩」といった対比が、静寂の屋敷の中に響き渡る。

「聴いたことのない曲。ジンが作ったのですか？」

冷めきった紅茶を嗜みながら、父は声を発する。

その飲み方には優雅さがあるが、あくまで癖のようなものだ。今となつては味や香りを彼は愉しむことはない。彼こそが俺の義理の父親であるオリバー・シユトロームである。銀色とは決して言えない、白髪で色黒の男性で、非常に整った顔立ちをしている。

「いえ。異世界の、有名な編曲ですよ。」

演奏を続けながら、答える。

「ほう、前世の曲ですか。」

『G線上のアリア』、と言います。」

「アリア、ですか。いやはや、すばらしい曲ですね。」

いつも通り無機質に、父は演奏を賞賛してくれる。

さて、俺には前世がある。異世界転生だとか、異世界転移だとか、憑依だとか、そういう類のものだろう。あくまで空想上のものだと信じていたので、まさか自分が体験することになるとは思わなかった。生まれ変わった場所は廃墟で、気づけば13歳くらいの少年だった。魔物などいなくて、文明の発達した平和な日本で生まれた俺が1人で生きていくことなどできない。

優しさを完全に失った彼が拾ってくれたのは、『対価』があるから。

「それで、実験の方は順調なのですか？」

「ええ。順調に、憎しみが芽生えてきているようですよ。」

彼の復讐のため。

魔力を人一倍持つ身体と、異世界の知識を差し出した。

この世界の魔法について、2人で研鑽してきた。

「15歳で成人年齢なんて、ずいぶんと無茶苦茶だよな。まだまだ情緒不安定なお年頃だろうに。まっ、それが好都合なんだけども。実験が順調ってのはいいことだ。」

自然と、笑みが零れる。

人体実験が赦されるかどうか、どうでもいい

「成人しても、対象に成りうる者はいますがね。それと、乱れていますよ。」

「おっと、失礼。」

自分の身体を弄った。

たった2年で、俺たち2人がこの世界のトップレベルまで辿り着くのはそう簡単なことではなかった。父が持っていた才能は魔人化したことだけで、財産も地位も人員も0からスタートした。今は同志と呼べる協力者たちがいて、俺たちは賢者や導師の実力にも追いついたはずである。

『『恐怖』と『拒絶』による魔人化、そういうケースは2人だけですよ。』

『『絶望』と『憎悪』による魔人化も、歴史上でもたった2人でしょうに。』

「それもそうでしたね。ジンたちは私にとっては興味深い覚醒方法でしたよ。」

それぞれの魔人で、残った感情は異なる。俺と彼女は生きること自体を渴望しているが、父は目的を果たすためにだけに生きている。

「俺もある意味温室暮らしでしたからね。魔物やヒトに殺される可能性のある世界なんて、願い下げです。」

元日本人で魔物や人に立ち向かえるやつは、なんて強固な精神をし

ているのだろうか。『死』が怖いから、誰よりも強い力を求めた。英雄やヒーローのように、誰かのために力を求めることなどは決してなかった。

だから父親の復讐に対する協力は、あくまで通過点に過ぎない。

「話が逸れましたね。リッツバーグは？」

「アールスハイド高等魔法学院に無事に入学できましたよ。」

「おつ、優秀優秀。」

「本人は、Aクラスであることに憤りを見せていましたがね。」

「へえ、聞いた限りの彼なら、ギリギリSクラスに入れると思っただけですが。」

カートンフォンリッツバーグという、試験体だ。伯爵家の次男で潜在能力は十分にあつたし、父が家庭教師をやっていた。そんな素直で自信家な彼に、『ブルースフィア帝国の貴族としての立ち振る舞い』を1年かけて父が教えれば、ここアールスハイド王国の中では孤立した。

選民思想のある帝国は、周辺国からよく思われていない。

「イレギュラーがあつたからでしょうね。もしかすると、天然ものの魔人になれるかもしれません。カート君が置かれている状況は、最初の魔人の時と似ていますから。」

「なにかきっかけが？」

「賢者の孫に接触したようですよ。」

「なるほど、噂の賢者の孫ですか。今回学園に入学するということが15歳。お年頃の色恋沙汰ですかね。」

「ええ。ジンと賢者の孫は同じ年、とは言えませんね。」

「まあ、そうですね。しかしそれは厄介なことなのでは。」

賢者と導師の孫の話題で、王都は持ちきりである。

しかし、2人の実子はすでに亡くなっているはずだ。

「厄介、とは。」

「魔人に対する対抗魔法や、浄化方法ですかね。」

「そう簡単に、魔人化は癒えませんよ。」

「それは、まあ。」

数十年の間に、魔人の浄化方法を研究しているかもしれない。ただ、今の魔人の数は世界でもたった3人なのだから、賢者や導師が得られる検体はいないか。

魔物ですら、浄化不可能なのだし。

「ふふっ。私の予想では、善い方向に向かうでしょうね。」

「そうなるといいんですけどね。」

愉悦しているな、と思いつつヴァイオリンを片付け始める。ケースに入れてさらに異空間収納の中に入れるだけだ。

この世界で確認された『最初の魔人』は、賢者の友人だった。賢者への嫉妬、導師に対しての失恋、魔法師団での不遇な扱い、婚約者の裏切り、『絶望』と『憎悪』を爆発させたカイルⅡマクリーンは理性を失って暴走したらしい。アールスハイド王国をたつた1人で壊滅寸前まで陥れたと言えば、魔人化の『恩恵』がよくわかる実例だ。

「つまり、そろそろ動くので？」

「ええ、我ながらよく我慢したと思いますよ。」

「そうですか。この屋敷ともお別れですね。」

「愛着が湧いたのですか？」

「地下の研究室に、ですけどね。」

ブルースファイア帝国への復讐のために、彼はこの2年を生きてきた。何をしてでも生きることが渴望している俺とは根本的に違う。だから考えてしまう。もし復讐を果たした時に彼は一体どうなってしまうのか。最初の魔人のように理性を失って暴走してしまうのか、愉悦だけ残した廃人になってしまうのか、それとも世界に対してさらなる復讐を求めるのか、はたまた俺の敵になるのか。

どのような結末が待っているとはいえ。

俺は死にたくない。

「俺に殺させないでくださいよ。父さん。」

「確証は持ってませんよ。ジン。」

いつも通り、無機質で曖昧な答え方だ。

だから、感情の籠っていない返事を返すしかない。

「そうですか。」

アリアさんと、生まれることもできなかつた子どもは、今の彼を見てどう思うのだろうか。彼女たちが復讐を望んでいるはずはないだろう。だがあくまで互いの渴望のために、彼の子を演じている俺には復讐を止める資格はない。強さを求めるといふ目的が一致していて、お互いを利用している関係だ。

今から2年前、彼はオリバー・シュトロームという名前ではなかつた。オリベイラ・フォン・ストラディウスは、帝位継承権を持つ公爵家の当主であつた。選民思想のある帝国貴族の中で、彼だけは異端だつた。

異端だつた彼だけが、道徳的だつた。

領民の財政状況を改善し、子どもを学校に通わせようとしていて、寝る間も惜しんで執務室で仕事を続けた。アリアさんと従者たちはそんな彼を献身的に支えていた。彼の努力が実つたおかげで、ストラディウス領は豊かな領地として、多くの平民が集まつてきた。

自分の搾取する領民が減る貴族たちは焦る。

よつて、他の帝国貴族に目をつけられた。

加えて、彼は王位継承権を持つている。

だから、同じ王位継承権持ちに疎まれた。

「ヘラルド・フォン・リッチモンド、現皇帝。」

「しかし彼も帝国によって教育された一人にすぎない、ということですか？」

「その通り。」

帝国では、今もなお平民は搾取されている。課される税に苦しむ平民、貧民街の中で短い命を散らす平民、帝国の政治に疑問を抱いた者たち、愛する女性を奪われた者、異端とされた姫。まあ、俺たちは彼ら彼女らのために復讐を行うわけではない。

彼の『憎悪』は、もはや個人に向けられたものではない。アリアさんの死はきっかけにすぎない。彼の涙はとっくに枯れていた。

「滅ぼすべきは、帝国そのもの。」

「残酷ですね。」

「残酷なんですよ、この世界は。」

「自然に溢れていて、前世の世界より美しいですよ。」

平民も巻き添えになるだろう。

まあ、『力』がないのだから仕方がない。

第三の魔人『オリバー』シュトローム』の暴走から生き残った唯一の少年は、運がよかつただけだ。闇の魔法によって大地が抉られてくる時、とある少年と俺は混じった。死にたくないという願いは一致し、ただひたすらに生を渴望した。父の暴走によって『死』を目の前にしたことなど、あくまできっかけにすぎない。まして、父は奇跡を与えてくれた。身体を駆け巡る魔力は魔人化してから莫大に増えている。

城壁の外では魔物が蔓延っていて、城壁の中では力無き者は虐げられる。アールスハイド王国も有限の平穏を得ているにすぎない。誰かを盾にするとか、自分が強くなるとか、そうしなければ生き残ることはできない。

カーテンが開け放たれ、雨の空が見えた。

まるで演奏会が始まったような、嬉々とした顔だ。

「始めましょうか。喜劇を。」
「愉しみましょう。父さん。」

『G線上のアリア』をまた聴かせる時は、来るのかどうか。会ったことのないカミサマしか知らないのだろう。

第2話 人工魔人化実験

この世界には魔法がある。

そして、それは『イメージ』によって成り立つとされる。

しかし、自由自在に魔法を扱える人は少ない。本来無意識に使っている自分の魔力を感じて、そして制御して魔法へと変換しなければならぬからだ。だから、詠唱魔法が主流となっている。また、『イメージ』の段階において、現象に対する疑いを持つてしまうのだ。今まで培ってきた経験だとか固定観念だとか、『常識』によって魔力をセーブしてしまう。

生物が魔力制御を誤り暴走させた末に至る存在を、人々は恐れている。だから、正しい魔法の扱い方を学院で学ぶ。

「アールスハイド高等魔法学院、ね。」

王族や貴族、さらに平民が通う学院へ俺は来ていた。騎士養成士官学院と並んで、国の最高の教育機関である。校舎、グラウンド、講堂といった広大な敷地を持っていて、どこことなく日本の高校に似ていた。しかし、ここは魔法について集団で切磋琢磨する学び舎である。

「ジン。ずいぶんと感傷的になってるんだな。」

「サスケ、いや士郎……あー、ローレンスか。」

「そう。ローレンスだ。」

この赤髪の青年は、同志の1人である。

ゼストさん並みに、いい声をしていると思う。

ゼストさんの部下は計7人で全員諜報部隊で男性、ぶっちゃけ同じ顔に見えるのだ。白昼堂々、林の木の枝に腰掛けて、学校にいる生徒たちを見ている。ずいぶんと防衛が緩い学校であることはローレンスも思っているだろう。

「相変わらず、他人に興味ないんだな。」

「皮肉か。父さんほどじゃないし、それに。魔人化すればわかるだろう。」

「へへっ、それは楽しみだな。」

今回の実験が成功すれば、次は彼らと彼女の番だ。2年でずいぶん多くの協力者を得ることができたのは、元々帝国に疑問を持っていた者たちだからである。諜報部隊隊長であるゼストさんとその部下たちを仲間にできたのは、かなり幸運なことだ。

「そうそう、お姫様がお呼びだったぞ。」

「1週間前に会っただろうに。ていうか、俺のどこがいいんだろうな。副隊長のアベルさんの方がクールでイケメンでかっこいいだろう?」「それはまあ。だが、そういうのは本人に言ってくれ。」

黒髪黒目という、魔人化して変わった日本人らしい容姿は、この世界では珍しい。あまり見ないタイプの俺に対して好意を抱いているお姫様はなかなか趣味嗜好が変わっていると思う。

「おっと、カート君が来たぞ。」

「わかってる。」

遠見の魔法を俺たちは使用して、校門を見ていた。

ふらふらと、試験体が門をくぐった。

父は中等学院の魔法教師として働いていたし、彼の家庭教師もやっていた。リッツバーグでは顔馴染みの父は、自宅謹慎中の彼を解放しに行ったのだ。負の感情が十分溜まった状態で、魔人の魔力を一気に籠めたのなら、人工魔人の完成である。

「戦力確認の、実験開始だな。」

嫉妬に埋め尽くされた紅い目は、宿敵を捉えた。

詠唱するは、火の魔法。

「ウォルフオードオ!! シねエ!!」

「くそっ!!」

憎悪の籠った火球を防いだのは、障壁魔法。

件の、賢者の孫だろう。

魔人の放った魔法の威力と、賢者の孫の強固な障壁魔法、その両方に感心したローレンスは口笛を吹いた。孫は魔力の扱い方が上手く、賢者にかなり鍛えられていることが伺える。賢者や導師クラスの實力はすでにあるようだ。

いつか、愉しい戦いができそうだ。

「やるねえ」

「無詠唱魔法とはいえ、咄嗟の行動で防ぎきれなかったようだけだな。」

「つて……おいおい、あれは一体?」

「魔道具による自動治癒。厄介な装備をしているな。」

「なるほどな。さすがは、導師の孫ということか。」

賢者の孫が両手に負った火傷は、少しずつ治っていった。制服自体の耐久力も向上させているのだろう。魔力は彼自前のものとはいえ、魔人の能力を再現している。魔人化したとはいえ、リッツバーグの苦戦は免れない。

「カートか!?!」

「なんで!?! 自宅謹慎中だったんじゃないの!?!」

騒ぎ始める学院生たち。まだ彼ら彼女らには実戦経験もないのだから、仕方がないことなのだろう。対して、教師たちは慌てて避難するように誘導しているが、前線に出てくることはなかった。

「オーグ! 皆を避難させろ! あれはマズイ!!」

「わ、わかった!!」

収納魔法から取り出した剣も魔道具のようだ。微細振動する剣はその斬れ味を増している。制服の魔法付与も加えて、さすがは導師の孫といったところだ。火球を放つリッツバーグの攻撃を避けながら、片腕を鮮やかに斬り落としたこともあって、剣術も習っているのだろう。

流れだした血液と、魔人の特性で腕が生え変わったことに、口元を抑える生徒が多数。

「おいおい、無茶苦茶強いな。賢者の孫。」

「ああ。ずいぶん躊躇いなく、15歳の青年が人に剣を向けられるな。魔力制御はともかく、常に冷静沈着なのは年相応じゃない気がする。」

「よほどの訓練を受けたか、どっかの誰かさんと同じで年齢詐称か?」

ただの15歳のガキには思えない。賢者の孫はたぶん30歳は超

えてるだろ。」

「かもな。だが俺は前世合わせても、まだ20代だ。」

「奇想天外な魔道具を作るところは、同じだろうな。」

「いや、奇想天外とはなんだ。異世界の、科学や創作の産物だ。」

もしかすると、転生者かもしれない。微細振動している剣や、風を噴出する靴を思いつくことなんて、この世界では非常識である。元日本なら、ゲームといった創作物をやっていけば思いついても、おかしくはない。

まあ、人を殺すことには慣れていない。

あくまで、無力化させようとしているのだろう。

「ウォル!!フォードオ!!」

「……なんだか。こいつ、大したことないぞ?」

魔法と剣で応戦する賢者の孫は、呟いた。

さすがに人工魔人は、天然ものよりは弱いことが今回の実験でわかった。かつて王国を滅ぼしかけた魔人の域には全く達していない。まあ、常人だったリッツバーグがこれほどの戦力強化となっているのだから、ゼストさんたちには大きな利益をもたらすだろう。

「シシリー、オレハオレハ……」

「カートさん、意識があるんですか!?!」

水色の髪の美少女が後方から呼びかけた。その声にニヤリとしたリッツバーグは、彼女の所へ駆けていく。本能のままに雌に近づいていく姿はもはや獣のようである。恋敵である賢者の孫が、彼の行く手を阻む。

「シシリー、がホシイ!!イッショにイナル!!」

「こいつ、自爆する気か!?!」

「アアアアあああおうあああ!!」

このまま自爆してもらっては俺も困る。

よって、ローブのフードを深く被って走る。

「シイイイエエー!!」

「カート、すまん!!」

(人を殺したくなかったけど、やるしかないかつ!!)

「させねえよ。」

首筋を狙った剣の軌道に、俺の剣を乗せる。

金属同士がぶつかり合い、甲高い音が響いた。

「くっ」

(新手か!)

魔力を纏った剣は、生物を斬ることを得意とする微細振動の刃を通さない。リッツバーグを拳で気絶させたローレンスとともに、ゲートの魔法で帝都の屋敷の地下に転移させておく。賢者の孫がイレギュラーな強さなだけで、彼も兵力としては申し分ない駒である。

『悪いな、邪魔して。』

『日本語!?! お前は誰だ!?!お前も魔人なのか!?!カートはどこにやった!?!』

『質問が多いな。質問するときには挙手するって、小学校で習わなかったか?』

『お前も転生者なのか?』

(小学校って、もしかしてギャグのつもりか?)

「正解。どうだ、同窓会でもやるか?」

「こいつ... それなら。お前が幹事、な!!」

(まさか味方になってくれるのか? 一体なぜカートをゲートで逃がしたんだ?そもそも、なぜ顔を隠す?)

剣を弾き、距離を取られた。

地面に剣を置いた俺は降参のポーズだ。

「まだやる気か?」

「ない。」

ていうか、剣術のド素人の俺が敵うはずもない。

「シン君、大丈夫ですか!?!」

「ああ、俺は大丈夫。」

「さすがだな、シン。」

魔人がいなくなった途端に、美男美女が駆け寄って来る。魔力付与ガチガチの制服をプレゼントした2人が声をかけていた。俺に敵意がないことがわかっていているのだろうし、素晴らしい強さの賢者の孫様がいらっしやるし。

それでも、油断しすぎなのでは。

「それで、お前は何者だ？ 先程、リッツバークを庇ったように見えたが。まずは、顔を見せろ。」

「何者かについての答えなのだが。俺は賢者の孫様とは同郷の、しくない平民だよ。」

「でも、シン君ってずっとマーリン様と暮らしていたのでは？」

「……どういふことだ？」

まさか、転生したことを黙っているのか。

確かに『秘密』を伝えることは自分にとって不利益になるとはいえ、知識だけは自分のために有効活用している。そして、その知識で得られた物を分け与える。秘密を独りで抱えたまま。

それでいて仲間を大切にする。

なんていうか、中途半端なやつだ。

「おい、聞いているのか。」

「お前、ずいぶんと偉そうだな。」

「なっ!? この方は殿下でござるよー!」

……(ぎょる?)

「なんだ、偉いのか。」

それはさておき、この少年が、アウグストⅡフォンⅡアールスハイドか。この国の唯一の王子らしく、次期国王第一候補である。生きることを護衛たちに委ねず、日々研鑽していることは同じ魔法使いとして感心する。

「やぞお強いのでしょーうね。」

異空間収納から取り出したのは、銃。

重厚感のある黒い塊を握り、銃口を向けた。

「それはっ!?!」

『ご名答。正真正銘、銃だ。』

「やめろっ!?!」

(こいつ、なんてものを作ってるんだ!?!洒落にならないだろ、それは!?)

俺たちだけが、この世界でその武器を知っている。

「シン君……?」

「ていうか、俺が味方だなんて。まだ言っていないぞ?」

「シシリー! オーグ! 魔力を纏え!!」

(間に合うか!?)

バンツ、という音が鳴り響く。

甲高い音に、賢者の孫以外は大きく口を開いて驚いていた。顔に手を当てたり、自分の身体を確認したり、キョロキョロと周りを見たり、何が起きたかを理解できていない。彼ら彼女らが無事であることは確かだ。

「……………空砲、か」

「一体、それは何だ?」

「ちよつとしたサプライズグッズだ。なっ、賢者の孫?」

「あ、ああ。」

(性格悪いぜ……)

「では、またいつか。魔人リッツバーグは俺が診てやるよ。」

「ま、まてっ!?!」

ゲートの魔法を、無詠唱で開いた。

——— 今度また、愉しませてくれよ

第3話 検分

ブルースファイア帝国は、アールスハイド王国と同じくらいの規模を誇る大国である。帝国のトップである皇帝は世襲制ではなく、帝位継承権を持つ帝国公爵家当主の中から選挙によって選出される。元日本人としては民主的な政治が行われているのだと初めは考えていたが、現実はその甘くはない。選挙権を持つのはあくまで貴族と裕福な商人だけで、平民に対しては圧政が行われているのだ。

貴族が住むにしては、二回りほど小さな屋敷の前に俺は転移してきた。帝都の中心に近いため、華やかな賑やかさが聞こえてくる。まあ、それも平民の犠牲によって成り立っている裕福さにすぎない。

「お待ちしておりました、ジン様。」

とてもダンディーな声である。

「俺なんかにかしこまらなくていいですよ、ゼストさん。」

「いえ、シュトローム様のご子息ですから。」

まるで執事のような所作で出迎えてくれるダンディーな男性、彼こそが諜報部隊隊長である。父に対する忠誠心は高く、またローレンスたち部下に対する思いやりも深いという、人格者である。

屋敷の中に入れば、赤絨毯や豪華な調度品。

ありふれた屋敷なのだが、諜報部隊の隠れ蓑。

「魔人は、地下に閉じ込めております。」

「暴れたか？」

「ええ、かなり手こずりましたよ。」

「それは……、お疲れ様」

この世界では、魔力封じなんてものはない。もし、魔力を封じることができたのならそれは対象者の『死』である。今頃リッツバーグは、鎖や行動不能の魔道具で雁字搦めにされていることだろう。

彼の『憎悪』は増していくばかり。

天然ものの魔人となる可能性が高い。

「おかえりなさい、ジン」

可愛らしい声は、耳にスツと入ってくる。

嬉しそうに微笑みながら、美少女と美女が階段を降りてきた。父もそうなのだが、貴族としての所作を教育によって身につけている彼女たちと、元日本人の俺とでは身分の違いを感じさせられる。

「ただいま。ソニヤ、ミリアさん。」

雪のように綺麗な銀色の髪と、生まれながらの紅い瞳が特徴的な小柄な美少女であるソニヤ。ブルーファイア。そして、彼女と対象的に金色の髪を持つ美女であるミリア。フオン。サウスロットさんだ。フオンの名を持っていることからわかるように、2人ともそれぞれの帝国公爵家の生まれで、ソニヤに至っては現皇帝とは異母兄妹である。

「私、寂しかったのよ。ジンがいない間、本当に退屈だったわ。」

「いや、楽しい実験の最終段階だったし？」

「いつもいつも実験実験って。親子揃ってよくもまあ飽きないわね。私たちのことを放っておいて。ねえ、ミリアもそう思うでしょ？」

「しかしシュトローム様たちは我々のための実験を……」

「はいはい。あなたがオリバーのことが大好きなことはわかったから。」

「い、いえ、そんなことは……」

父に対して深い忠誠と恋慕を抱いているけれど、魔人化した父は決して応えることはない。こればかりは、復讐が終わってから父がどう変わるかを様子見するしかない。ソニヤのように、感情豊かな魔人は特別なはずだ。

「ねえ、また異世界のお伽話を聞かせて？」

「いや、俺はリッツバークを診たいのだが。」

「そんなこと、後でいいでしょう？」

小さな身体で俺の腕に抱きつき、見上げる。

彼女が甘える時には、いつも甘えさせてしまう。膨大な魔力と紅い目を持って生まれた忌み子は魔人ではないかと疑われ、幽閉されて育ったソニヤは第二の魔人と化した。彼女の母親を目の前で殺されるという、残酷な運命を歩んできたのだ。

「まあ、明日の朝までにやればいいか。」

「うんっ！」

幸せそうな顔を見て、平和な日本を懐かしんでしまう。

まだまだ未練は捨てきれないし、死ねないな。

リッツバーグについてはそれはもう暴れて仕方がない。人工魔人化したとはいえ、その凶暴さからは彼の憎悪の大きさや精神の脆さが伺える。2つとも魔人化にとってはメリットであって逸材である。

第二の魔人の誕生、そして『討伐した賢者の孫』。

よって、王都は朝からずっと騒がしいままだ。

ここは中等学院、かつて件のリッツバーグも通っていた。警備局捜査官であるオルト||リツカーマンと部下は、魔人化の参考人としてオリバー||シュトロームを訪ねてきた。眼帯で両眼を覆ったまま教鞭を取るといふ、父を注視している。

「お忙しい所すいません。シュトローム先生。」

「お邪魔します」

「いえ、良いですよ。紅茶を出させますので。」

「お構いなく。」

各種魔法を制御しながら、紅茶を淹れる俺に目を向けた。

「彼は？」

「助手や弟子みたいなものですよ。」

軽く会釈して置いた紅茶を飲み、彼らは目を見開く。美味しいと思ってくれるのなら、『手向け』になるだろう。彼らはすでに父がリツ

ツバークの魔人化に大きく関わっているのではないかと、疑っている。しかし俺たちは殺人鬼ではないから、こちらから手を出すことはない。

「シュトローム先生は帝国の出身だとか。不躰な質問で失礼しますが、どういった経緯で我が王国に来られたのか、教えて頂いても？」

帝国から王国に亡命してくる人は多いのだ。

それほど、帝国の政治は腐敗している。

「私が王国に来た理由ですか……。それが恥ずかしい話でしてね。私は帝国の貴族の家に生まれたのですが。」

「て、帝国貴族の方でしたか。」

「ええ。実家の跡目争いに敗れましてね。私を亡き者にしようとする親族から命からがら逃げ出し、王国へ亡命してきたのですよ。この目もその時の襲撃で傷を負ってしまっただけ。」

「そうですか。お話しさせて申し訳ございません。」

「いえ、もう過ぎたことですよ。」

質問している捜査官も、メモを取っている部下も、父に同情しているようだ。

「そう言えば、学院生徒の魔人化ですからね。やはり教え子なのでしょうか？」

「ええ。ここに務めて2年程ですが、まさかあんなことになるとは。」

「……しかし、今回の事は残念でしたね。」

「カート君を教えた教師としては、彼の安否が気になります。いやはや、彼はこの先どうなるのやら。」

父が先に、カートの名を出した。

捜査官の鋭い目つきはそれを見逃さない。

「……シュトローム先生、一つお願いを聞いて頂いてもよろしいですか？」

「どうしました？」

「高位の魔法使いであるあなたに、賢者の孫が討伐した魔人の遺体の検分を行ってほしいのです。」

「はて、討伐？ それに遺体を、ですか？」

「ええ。警備隊でこれから検分を行う予定です。」

「……教え子の検分は気が乗りませんが、ご協力させていただきますよ。」

「ありがとうございます。では、早速行きましょうか。」

中等学院から、4人で出ていく。

捜査官の部下なんて、歩き方がぎこちない。

「それにしても、ウォルフオード君の話題で持ちきりですねー？」

「えっ、ええ。まあ。」

「第二の魔人の『討伐』、でしたよねー？」

「そうですね。さすがは賢者と導師の孫かと。」

「同年代としては、見習いたいなーつと。」

「君は学院には？」

「通っていませんよ。」

着いた先は、練兵場。

もちろん、遺体などは一つもない。

「ふふっ。彼の遺体はどこに？」

「騙して申し訳ございませんね。貴方の検分を行います。」

「どういうことでしょうかね？」

練兵場を50人ほどの兵士が囲った。魔法使いや騎士、この詰所にいる戦力を集めてきたようだ。

父はずいぶんと愉しそうにしていた。

第4話 知識チート

参考人から容疑者に格上げ。

捜査官に連れられてきた場所は、王国軍の練兵場である。つまり、数十人規模の戦力が一瞬でかき集めることができる。武器を構え、詠唱魔法を準備しながら、そんな彼女ら彼女らに俺たち2人は睨まれている。父も俺もこのような面白い状況を愉しんでいた。

「はて、このような状況。身に覚えのない罪に問われている気がしますか？」

「魔人化した人間が誰か、箝口令が敷かれている状態です。リッツバーグ邸でもあくまで行方不明者が出ているだけ。だから、魔人化した者が誰かを知る人物はそう多くはないですよ。」

「それで？」

「王都に広まっているのは『高等魔法学院で魔人が出現し、偶々居合わせた英雄の孫であるシン||ウオルフォードが魔人を討伐した』という話。しかし、討伐したという内容に貴方は疑問を抱いた。——加えて、どこでカート||フォン||リッツバーグが魔人化したと知ったのですか？」

「まるで推理ドラマだな。」

「……君、ドラマとは？」

「故郷の言葉、気にしないでください。」

「クックク、ええ、楽しい推理でしたよ。まさかそのような内容にすり替えられていたとは。いやはや、楽しい。世俗に疎いことで、まんまと騙されましたよ。」

「もちろん俺たちは抵抗するぞ。」

俺たちは愉悦の表情を浮かべながら巨大な魔力を纏い始める。感じたことのない魔力量に彼ら彼女らは目を見開いた。冷や汗を掻き、まるで超級の魔物にでも会ったかのような顔をしている。

「構わん。——放て!!」

「ファイヤーボール!」「ウォーターシユート!」

「ウインドストーム!」「アースブラスト!」

詠唱をして準備しておいたようだ。

火、水、風、土の属性の攻撃魔法が襲い来る。

「いい魔法、だが無意味だ。」

「障壁魔法!?!」

半透明の壁は、何もかも防いだ。これこそが障壁魔法、その強固さは魔力量や魔力制御に依存する。魔人である俺たちが使えば賢者くらいでないと破れないバリアとなる。

「さて。もう愉しいこともないでしょうから、帰りますよ。」

「了解。」

手を振りかざして無詠唱で魔力を放つ。

「無詠唱魔法か!?!」

「みんな、屈むんだ!!」

轟音が鳴り響く。

それは、爆破の魔法で練兵場の壁を壊した音だ。

「絶対に逃すな! また犠牲者が出るぞ!!」

悠々と背中を向けて歩いていく俺たち。

魔法も剣も、強固な魔力障壁に阻まれている。

「今回の実験も最終段階ですよ。」

「実験だ?!?! どういうことだ!?!」

「答える義理はないけれど特別に教えてやる。人工的な魔人化実験だ。幸運にも、リッツバーグはその栄えある第一号となったわけ。」

「き、貴様ら!?! 未来ある少年の命を! 身勝手な目的で使ったというのか!?!」

彼ら彼女らは激昂し、さらに魔法の威力と数が倍増した。だがしかし障壁魔法は耐魔力がより強いのだから、せめて物理で攻めてくるべきだ。

まったく。魔法について研究不足である。

「ていうか死んでないし、強くなれてあいつも本望でしょう。」

「貴様らア!!」

「正義というやつですか。そろそろ、鬱陶しいですね」

父は、手を兵士たちに向けた。
楽しい時間はすでに終わりを告げた。

これから起きるのは、一方的な蹂躪である。

「おお!? 何の騒ぎだこりゃ!?!」

「シン||ウォルフオードか。」

「ほう、彼が。」

偶然にも彼は通りがかつたのだろう。

まるで主人公のような、トラブル遭遇率である。

「オーグ、あれって……」

(眼帯なのに、こつちが見えてるのか?)

「ああ、間違いない。先程言っていた、中等学院の胡散臭い教師オリバー||シュトロームだ。」

「あいつがカートを……」

(隣にいるのは日本人に見える。もしかしてこの前のあいつか?)

「お逃げ下さいアウグスト殿下!」

「奴こそが魔人騒動の真犯人です!!」

国のために人生を捧げるといふ、彼らは殿下に叫ぶ。

仕事熱心なことだ。

しかし、彼らはいまだ冷静に俺たちを見てくる。

「おい。お前らがカートを操っていた奴か?」

「操る、とは違いますかね。まあ、愉しいくらい思い通りに踊ってくれましたよ。」

「そうかよ、胸糞悪いな……」

「おや。貴方も私が赦せませんか?」

「ああ、許せないね。お前のお陰で皆がどんだけ迷惑を被ったと思つてんだ。」

水色髪美少女のことを言っているのだろう。元々恋慕していたリッツバーグの行動には拍車がかかったらしいし。今もなお魔人

リッツバーグは、シシリーを欲し、ウォルフオードを憎み続けている。

「お前を放置してるとまた迷惑を掛けられそうだからな。おとなしく捕まってるよ!」

微細振動する剣を構え、手のひらを向けて青い炎の矢を放つてくる。酸素とか水素とか混ぜて、さらに高温した炎だろう。その温度はもし当たれば、一般人の人体にはひとたまりもない威力である。捕まえるとはよく言ったものだ。

「炎には、水だな。」

求めるは、より大きい水圧。

異空間の膨大な水を圧縮し、魔力を籠めて槍と化する。

「岩をも貫く水の槍、ウォーターレーザー!!」

「グツ」

(痛えな、ちくしょうっ!)

炎の矢をかき消し、魔道具である制服にぶち当たる。

しかし、自動障壁を貫くまでには至らなかったようだ。

「シン君!?!」

「シン、大丈夫か!?!」

「あつ、ああ。」

(というか詠唱魔法かよ。お前も中二病かよ!?)

「そうか。お前は何者だ?」

「その質問は2度目だな、殿下さま」

「まさか、あの時の?」

「ジン!! シュトロームだ。ていうか、このまま帰らせてくれないか?」

「馬鹿にするな!」

(ずっと同じ所にいる訳ねえだろうが!)

防がれると予想していたウォルフオードは魔法を放った後、俺の後ろに回っていた。その見事な剣捌きで、微細振動する剣を振り抜く。

視えている剣の軌道を妨げるように、俺は右腕を盾とする。

バキツという音が鳴り響き、剣は折れる。
「なっ!?!」

「微細振動によつて切断力はあるが、耐久性のない魔道具だな。いつまでも気を抜かずに、刃を取替えろよ。まさか進撃の巨人を見ていないのか?」

「……お前に言われなくても、今日はそれを作ろうしていたんだよ。それと、その腕は何だ?」

「ドラゴンの遺伝子を移植した。どうだ、龍人っぽいだろ。」

グローブを外せば、赤い鱗と爪が特徴的な手が現れる。ドラゴンは幻獣種として扱われ、最強種として数十体だけ秘境に生存している。決して弱くなどはない。再生能力のある魔人のままでは防御力が心もとなかった。

「無茶苦茶な強化、だな。」

「どうせ知識チートをするからにはベストを尽くさないとな。」

「人体改造なんてイかれてるな、お前。」

「そうか?自分が強くなるためなら手段は選ばない。これもな。」

異空間収納から取り出すのは、銃。

今回は実弾を籠めている。

「さて。魔法耐性のある障壁魔法に対して。物理攻撃は通用するのかわいか、自動障壁は反射的に発動するのか。実験開始だ。」

「おい、待て。一体なんでこんなことを!?!」

「だって、愉しいだろ。」

——なあ、転生者?」

パンツという音。

制服の肩を撃てば、苦痛に歪んだ。

もし避ければ、背後の殿下サマたちにその凶器が向かう。誰かを守るという事は、そう簡単なことではない。

パンツパンツパンツ

腕をクロスさせて、顔や頭を守っている。

つまり、魔力付与制服も万能ではないということ。

「シン君!？」

「ねえ、大丈夫なの!？」

「一体、あれはどんな武器なのでござるか!？」

「はあはあ、残念だったな。」

「実験は成功だけが全てじゃないぞ。失敗は成功の母って言うだろ。さて、次なる実験だ。もし銃弾に魔力を籠めたのなら、威力は増す。つまり、魔力付与同士で同条件。」

バンツ

「いてえ、な……」

「シン!？」

「シン君!？」

肩からは紅い血が流れ出るが、たちまち治癒していく。

銃弾が貫通したのは運がよかったな。

水色髪美少女たちが走ってこようとするのを、ウォルフオードは手で制した。

「今度は……、こっちの番だ!!」

「なんかまぶしい……!？」

上空から太陽光を収束すれば、それは熱線と化す。

「グウオアアアアア!!」

熱く、焼かれる。

怖い怖い怖い怖い怖い

「「「やったか!？」」」

「まさかジンが傷を負うことになるとは。実に愉しい相手ですね、賢者の孫。」

「……………ああ、怖かったなあ。」

服は全て焼け焦げ、龍の皮膚以外は焼け爛れる。

見るにも耐えない見た目だろう。

「怖かったぞ。俺を殺す気か?」

全裸にされたので、異空間から取り出したローブを着る。そんな俺の身体はハイペースで治癒していた。

「修復、しているのか？ まさか、お前は。」

「そう、魔人だ。天然もののな。」

「馬鹿な!? 3人目の魔人だと!？」

「最初の魔人並みってことじゃないの!？」

「シン君……」

父が3人目であつて、俺は4人目である。しかし教える義理はない。ていうか時々、口を挟んでくる殿下サマたちは足手纏いであることに気づいているのだろうか。さつさと逃げた方がウォルフオードも戦いやすいだろう。

「どうする、お爺様とお婆様に助けてもらうか？」

「俺だけでなんとかなるさ。」

（マズい、もしこいつを倒してもシュトロームがいる。ここは一旦退くか？）

「そうそう、ラッキーなことを教えてやる。」

「私たちはもうこの国に用はないんですよ。」

「なんだつて？」

「俺たちは眼中にないということか。」

「じゃあ、どんな目的があるのよ？」

最後まで上から目線だ。

しかし憤りや不満、そういう感情を抱くことはない。

「1つだけ言うなら、別に俺たちは殺人鬼じゃない。先に武器を向けてきたのはお前からだからだな。リッツバーグが無事に魔人化できたのはウォルフオードに対する憎悪が原因。」

——だから俺は悪くない。

ゲートを開き、去る。

こんなところで油を売っている暇はないのだ。

父の復讐は、もう我慢できないだろう。

第5話 復讐

王国軍と帝国軍の戦争が勃発。

戦場は、国境に位置する平原である。ここは以前両国が争った場所であり、血の染みだした土の上にはすでに草が生い茂っていた。この世界では魔法師が後方支援を担い、騎士や兵士が前に出るために連携は重要視される。しかし彼ら彼女らにはそれぞれのプライドがあって、その不仲は帝国軍が顕著である。

それでも、皇帝の命令だけは絶対なのである。

本当に急な出兵であった。

「御報告申し上げます。王国軍は魔物の対応に追われ、今もなお軍勢を整備する事にも苦勞しているようです。陣の位置は十年前と同じでしょう。」

「そうか、ご苦勞だったな。諜報部隊。」

ゼストさんたちは黙したまま、退出する。

皇帝陛下はゆったりと椅子に腰掛けて、顎をさすっていた。優雅さの欠片もない面子だが、平民上がりにしては役に立つ奴らだと、彼は満足しているご様子だ。

「將軍。王国に勝てそうか？」

「はい、皇帝陛下。王国は魔物の対応に四苦八苦。よってこのまま、この大軍勢をもってして王国に進軍すれば我々の大勝利は間違い無しかと。」

「フン、そうだろう。帝国から魔物が減り、王国の魔物が増えたと報告を受けた時に余は確信したのだ。王国は魔物の対応に追われ、我々の猛攻を防ぐ事など出来んとな。」

「さすがで御座います、陛下。」

「よしっ、進軍せよ！」

「はっ!!」

ゼストさん率いる諜報部隊の活躍に、ヘラルドⅡフォンⅡブルースフィアはご満足の様子だ。魔物の大移動の報告に対して、野心溢れる

彼は直ちに軍備を行った。まさに機を見るに敏である。まあ、王国のことだけを考えて帝国の全軍を集めたのは愚行である。

加えて、虚偽の報告にまんまと騙されている。

「フッフ、これで王国は手に入ったも同然。」

「ご、ご報告いたしますっ!」

「なんだ、一体?」

賄賂、便宜、脅迫、私刑、奴隷売買、そして暗殺。そういうことを行ってようやく皇帝となった彼には、能力はともかく人望もなかった。帝国の公爵貴族としてのプライド、そして狡猾さだけが彼の取り柄である。

だから、嵌められた。

「王国軍、およそ10万すでに布陣しておりますっ!!」

「どういうことだ!」

「お、おいつ、誰かゼストを呼べ!」

側近たちは顔を見合わせるだけで、所在不明である。そもそも指揮系統については皇帝が率先して行っていたのだから、彼らに命令してもどうにもならない。座ったまま貧乏ゆすりしながら、ただひたすらに待つ。

「このっ、諜報部隊の役立たず共が!全員死刑にしてくれるわっ!」

怒鳴り散らし椅子の肘掛けを叩く。どうやら皇帝の頭の中は、無能の平民上がりたちの処罰をいかにするかでいっぱいっぽいのだ。将軍は恐る恐る、戦況を変えるべく進言する。

もちろん将軍の方が戦争についてよくわかっている。

「へ、陛下。一度退いて態勢を立て直すべきかと。」

「さつき進軍させたばかりではないかっ!? このまま突撃せよっ!」

「なにをおっしゃりますか!」

「ええいつ!どうせ王国軍は排除する予定だったのだ! それが遅いか早いかの差でしかない!」

勢いよく太った身体で立ち上がり、大きく息を吸い込んだ。

「全軍に告ぐ!我等の力を王国軍に見せ付けてやるのだ!——全軍、突撃いい!!」

急な命令にドタバタと陣営内では準備が始まった。すでに出立した先行部隊を追いかけるように、ほとんどの兵士が尻を叩かれて次々と走っていく。もはや指揮系統は機能しておらず、彼らに陣形なんてものは決してない。

夕暮れの中、6万もの平民が嘆きながら死地に向かって行った。

王国軍は盤石の態勢をすでに築いている。

「本当に突撃してきやがった。何考えてんだ？」

「魔法師団、放て!!」

1万を超える魔法師による魔法が、帝国軍に着弾していく。

——断末魔

計4万人の、死傷者及び捕虜が生まれたのは当然のことである。どちらかというところ捕虜の数が多く、戦争開始からたった数時間で帝国の完敗は見えていた。軍を率いた愚かな皇帝は責任を転嫁し、逃げ帰ってきた平民を叱責する。

「くっ、どいつもこいつも……」

荒れ狂う皇帝に、側近たちは押し黙ってしまった。

「報告します！」

「今度は何だ、キサマ!?!」

「魔物が大量に発生っ！中型以上の魔物が大量に発生し侵攻を開始しております！——行き先は『帝都』です!!」

「何っ!?!」

「加えてっ!!魔人を多数目撃致しました!!その数はおよそ40人!!」

「な！何だと!!?」

「將軍、王国で出沒したのは1体ではなかったのか!?!」

「王国で討伐されたのはたった1体のはずです！」

同志の魔物ハンターたちが誘導した魔物は王国軍の足止めも行っているが、いつかは全滅させられるだろう。そして、帝都に攻め込んでいる人工魔人は傭兵が中心である。魔物ハンターも傭兵も『力』を求めすることに賛同した同志であって、別に仲間というわけではない。

父の復讐に手を貸してくれるのだから、文句はない。

「く、くそっ!?! 我の帝都をよくもっ!?! 全軍後退せよ!!」

「伝令っ! 急ぎ帝都まで後退だ!!」

「「「……は?」」」

俺たちはインビジブルでずっと隠れていた。

愉しいことをやっていたので、笑いをこらえることは大変だった。ゲームマスター気取りの皇帝の判断で、突撃させたり後退させたり。皇帝にとつて、兵士はチエスの駒なのだろう。チエスは接待プレーでしかやったことなさそうである。

「なんていうか、見ていて愉しいな。」

「声? 誰かいるのか!?!」

光を迂回させて対象を不可視にする魔法、インビジブルを解除する。ソニヤを見て、皇帝は椅子の上で一度飛び跳ねて震える指で指し示した。こんな可愛い少女のどこを恐れる必要があるのだろうか。

「こんにちは、お兄様。」

「ソニヤ! フォン! ブルースファイア……様……」

「な、なぜ、お前が生きているのだ!?!」

「あら、どうしてそんなに怖がっているのかしら?」

「だ、だれかつ、こいつを殺せ!」

「ふふっ、怖いこと言うわね。ジン、私がやるわ。」

影の糸が伸び、形を成す。ヒトガタを模す影はゆらりゆらりと俺たちを守るように囲む。剣を持って近づいてきた兵士を地に縛りつける。紅い瞳は妖艶に輝き、ソニヤは微笑みを零した。

「クソツ、化け物め!」

「化け物だなんて。淑女に失礼よ。」

「先に言っておくが、俺たちは殺人鬼ではないからな。目的を果たせばそれでいいから、ここにいる何人かは救われる。それと、皇帝様にビッグニユースだ。帝都にはオリベイラ! フォン! ストラディウス

「がいる。」

「なん、だど。奴も生きていたのか!？」

「今頃、貴族に恨みのある平民を魔人化させているだろうな。恨みはいつぱい、平民は歯向かうことのできる『力』を得た。残念ながら終わりだよ、お前ら帝国貴族は。」

「我だけは助けてくれ!!」

「……オリバーは貴方のこと、もう眼中にないけれど。私は赦せないの。」

「な、なんでもする。欲しいものをやろうっ!! 金か? 地位か? それとも、男か!？」

「私は平穏があればそれでいい。それと、ジン以外の男はいらないわ。」

「な、なら、皇帝の座を!？」

ソニヤは、無機質な表情となる。

生まれながらの紅い瞳はもつと紅く紅く

「私を虐めたこと、オリバーが苦しんだこと、そしてお母様が死んだこと、全部貴方のせいよ。貴方だけは決して赦さない。」

——ヤっちゃえ

巨人を模した影は、棍棒を振り上げる。

逃げ惑う人間は足を纏れさせて転んでしまう。

「我は、私は死にたくない!」

第6話 魔人らしき、人間らしき

オリバーは本格的に復讐を始めた。

ミリアさんやゼストさんたちはそんな彼に付き従った。

オリバーが魔法を放てば1つの街など破壊することは容易い。魔人が帝国民を1人1人戮り殺しすることは容易い。しかし彼にとって憎むべき対象は帝国そのものである。帝国民全員に絶望を与えることこそが復讐となるらしい。

「ほんとうに、静かね。」

街並みはある程度そのままに。

ゴーストタウンと化した帝都を、腕を組んで歩く。

「魔物は本能的に、魔人である俺たちを避けているのかもな。」

「そうね。この帝都にはいるのは魔人と魔物だけみたいね。」

まずは食料の流通をストップさせ、飢餓に苦しむ平民を増やす。そして裕福な暮らしを送っている貴族に憎しみを抱いた者を魔人化させ、彼ら彼女らが貴族や残りの兵士を殺した。平民が溜めてきた憎悪によって、高貴な血筋とやらは次々と断絶していった。

オリバーが貴族にまんまと騙された平民によって妻と子どもを殺されたように、騙しによって平民の手によって帝国は滅びた。そして、『力』を持たなかった平民は誰にも守られることなく、飢餓及び魔物によって息絶えて行った。

「こういうのデートって言うんでしょ？」

「もう少し日の当たる場所に連れていきたいけどな。」

「えーと、確かに今日は曇っているけど……」

こうやって、伸び伸びと彼女が街を歩くのは初めて。

幽閉されて育った彼女は外の世界を知らない。

愛してくれたのは、今は亡き母親だけ。

「……小さい子たちも死んでしまったのね。」

「……まあな。」

「ねえ、どうしてみんなは魔人にならなかったのかしら。魔人になって力を得れば、みんなは助かったのよ？」

すでに乾ききった血は街の至るところに見かける。人間の苦しみがあるのままだに残されていた。街に漂っている臭いを不快とは思えないのは、魔人になったからなのか、この残酷な世界に慣れてしまったからなのか。

「最初の魔人は王国を本能のままに滅ぼそうとしていたし、やっぱり普通の人間にとって魔人は恐怖の対象だからだろうな。魔人の言うことなんて信頼できるかって言っていたらどう？」

「なんていうか、まるで私たちが悪者みたいじゃない。」

「正義の味方ではないことは確かだけどな。」

今は亡き皇帝によって帝国全土から集められた、兵士や戦える平民はほとんどいなかった。オリバーの復讐を止めることを選ぶ気が全く俺は起きなかった。それほど、自分自身の生のみを優先していたということだ。

「ジン、災害級よ。」

「わかってる。」

この世界では、スライムやゴブリンといったよくある創作物に出てる魔物はいない。本来動物だった獣が魔物化するだけだ。猪や狼といった肉食獣が魔物化する傾向がある。また、虎や獅子は魔物化した時点で強力な魔物である災害級として扱われる。

魔力を外部から取り込むために、人や獣を喰らうことで巨大化する。

「ずいぶんと喰ったんだな。」

獰猛な獅子は極上の魔力を見つけて、紅い眼光を輝かせた。

このまま、餌になるつもりはない。

自然と、身体が動く。

ソニヤを守るように前に出た。

「岩よ穿て。大地より生まれし枷杭、アーススパイク！」

駆けてきた虎は鈍痛とともに急に上空へ。

地面から勢いよく突き上がる石柱は、虎を宙に打ち上げた。

そして異空間から現れた槍を、影兵が手にする。

「ランサー！ 獣を狩りなさい。」

帝国に伝わりし魔槍を統合し、貫かせる。

思い描くのは、風と炎の融合魔法。

周囲の空気を取り込む炎だ。

「渦巻く螺旋、ファイアストーム」

蒼炎の竜巻が災害級の魔物をいとも簡単に燃やし尽くす。

「呆気なかったわね。」

「俺たちに立ち向かった時点で、この周辺では1番強い魔物だったけどな。」

今はこうして穏やかな時間を過ごせているのだ。だがこの時間は有限なのではないか。そう思ってしまう。もちろん俺もソニヤも時々、特定の感情に呑まれそうになる。魔人化の恩恵である膨大な魔力が騒いで愉しみを求めるのだ。

「……いつ自分が呑まれるか、わからないよな。」

最初の魔人やリッツバーグは、呑まれたのだ。

リッツバーグを放つと、ふらふらとどこかへ行つた。

「怖いのかしら？」

「ああ。自分が魔物みたいになると思うと、な……」

「ねえ、ジンは魔人のままでいいの？ もし普通の人間に戻る方法があるんだったら、どうする？」

「強くなるためには好都合だったけど、な……。まだ方法はわかってないけれど、いつかソニヤが戻りたくなつたときに一緒に人に戻ろう。」

「うんっ」

わからないことや弱いことはひどく怖いことだから、何でもやってきたし実験を行ってきた。魔人化してから自分のことしか考えられなくなってきた俺が、唯一彼女だけは思うことができる。たぶんこの温かさがなければ、魔にとづくに呑まれていた。

自分の命の次に大切な命を、傷つけたくはない。

愛おしいとすら思っている。

「なんだか騒がしいわね。」

「魔人のリーダーへの、謁見だろうな。」

帝都の中心に聳え立つ、城へと入る。

豪華な内装は、貴族たちのかつての豪遊を示していた。

「なあ、いよいよだな！」

「ふつ、俺達魔人に敵う奴などいないさ。」

「次はたぶんスويد王国よね！」

「世界統一かあー」

「シュトローム様はこの世界を統べるお方だ。」

たった1ヶ月で帝国全土は滅亡したのだ。魔物が蔓延る国となつたため他国の介入はまだない。ガヤガヤと謁見の間には30人ほどだが、帝国内には人工魔人は合計150人ほどいるだろう。

謁見の間に入れば、年下の俺たちを畏怖する目が集まる。

「……ところで、用件はなんでしようか？」

帝国の歴代皇帝だけが座れる玉座でボーっとしながら、オリバーが口を開いた。彼の復讐はほとんど終わってしまったことになり、ほぼ全てを失った彼に残ったものは愉悦することだけである。つまり、愉悦できなければ感情の起伏はない。

「そ、その、次なるご命令をいただきたく。」

「皆さんのおかげで帝国は滅亡しました。ありがとうございました。」

「「勿体なきお言葉。」」

「では、残りの人生を好きに生きてくださいね。」

平民たちは思いもよらない言葉に目を見開いた。

「な、何をお戯れを……シュトローム様は世界を統一なされるのではないのですか？」

「なぜ私がそんな面倒なことを？」

「怠惰ですなえー」

「ねえ〜」

俺の膝の上で鼻歌を歌っているソニヤは、ずいぶんと機嫌がいい。魔物ハンターや傭兵たちは更なる戦いを求めて旅立った。だがしかし平民たちはオリバーの発言をただひたすらに待っていたのだ。忠誠心が高いことはいいいことなのだが、一体オリバーに何を期待していたのやら。

「それならなぜ、我々を魔人にしたのですか!？」

「貴方たちが自ら希望したからですよ。貴族への復讐がしなかったのではないですか?」

「そ、それはまあ。」

「よかったですね、目的を達成できて。」

これ以上何も言うことはない、オリバーの目はそう告げていた。

「くっ、俺は勝手にさせてもらう。」

「……私も少し考えさせてもらいます。」

「はい。次なる目標目指して頑張ってくださいね。」

残ったのはミアさんとゼストさんたちと、俺たちだけ。

巨大な帝都の城は静寂に包まれた。

「……よろしいのですか。あの者たちをあのまま放置していても?」

「構わないでしょう、すでに帝国の滅亡という共通目的は果たしましたから。好きにさせておけばいい。別に私の障害になる訳でもないでしょうし。」

「愚かな平民も復讐対象だった。」

「まんまと騙され、彼の妻と子を殺した。」

「それは、そうですが。」

「彼らがどうするかによつては、愉快いかもしれませんねえ」

「まあ、普通の兵士よりは強いし、1つくらいは国を落とそうだな。」

「それは愉しいことなのでしょうか?」

「さあ?」

「ねえ、あの人たちは世界を統一したいの?」

「そのようですね。しかし、彼等は分かっているんですかね。征服と統一はまるで違うんですよ。世界を統一した後、統治の事を考えているのかどうか。」

「シュトローム様……？」

かつて、彼も領地を持っていた。

平民優遇のために帝国の異端者として努めた。

「例えば、魔人の子は魔人なのか、魔人は子を産めるのか、そもそも魔人の寿命はどうなのか。そういう類の実験もなしに、世界統一するのでしょうか、彼らは。」

「シュトローム様……。いえ、オリバー様は実験がもし成功すれば、世界を統一なさるのですか？」

「それが、愉しいならいいことならね。」

ミリアさんはオリバーの隣から移動し、正面から見つめる。

魔人化した彼女は、まだ愛を失ってはいない。

「シュトローム様、その実験について私にお任せください。」

「ほう？」

「必ずやご期待に沿ってみせます。」

ミリアさんは、オリバーのために一歩踏み出した。

今は亡きアリアさん以外では、唯一彼の心を動かせる女性。

「では、実験を始めましょうか。」

最強の魔人オリバーははまだ、心を持つ人間を恐れている。

第7話 魔人は悪者？

帝国の滅亡からすでに2ヶ月ほど経ったが、いまだ近隣国に大きな動きはない。アールスハイド王国を破滅させる勢いだった、『最初の魔人』の脅威を知っている。だから、無理に手を出そうとは考えていないのだ。

「ふーん。これが賢者と導師の伝説？　なんだか読んで違和感が残ったわ。」

「美化して脚色されているからだろうな。」

「これだったら、ジンの話す物語の方が面白いわ。ねえ、作家になったらどう？」

「いや俺が話しているのは、異世界の著名作家が書いた話だからな、全部。」

「へえ、本当に愉しそうな世界なのね。いっぱいすごい人がいて、平和で。それに魔法も使わずに乗り物が空を飛ぶ世界かあ。」

彼女は新しいことを知ることを最近愉しんでいて、俺に様々なことを尋ねてくる。もちろん俺も知らないことばかりなのだが、前世のことに彼女はとても興味を示していた。この世界で生まれた彼女にとって、異世界は未知である。

「スويد王国。ここも城塞都市なのか。」

「私からすれば、堀に囲まれていない国の方が珍しいわよ。」

「俺が生まれた国は海で囲まれていたけどな。」

「島国、なのかしら？」

「それ。」

魔人と魔物が溢れる旧帝国領は魔人領と呼ばれ、多数の近隣国がそれぞれ国境において嚴重警戒態勢を敷いている。今もなお魔人の脅威を恐れている。そして、スويد王国もそんな国の1つである。

「なんだか苦戦しているな。」

「そうね。」

あくまで傍観しに来ただけだ。

ソニヤ以外を思いやれる感情は、今の俺にはない。

高い塀の上から魔法や弓矢が飛んできて、魔人は攻撃されている。魔法は得意ではないが、再生能力や高い身体能力を持つ魔人たちは壁をよじ登りながら応戦している。しかし本来、彼ら彼女らは普通の壁なら破壊できると思う。

「ちよつと失礼。」

浮遊魔法で塀の上へ。

俺たちの見た目は、一般的な魔人には見えないからな。

「な、何者だ!？」

「魔人……、なのか？」

「やっぱりこの人たちが持っているのは魔道具だわ。」

「支給品にしては、高級品だな。」

片手で持つことのできるワンドには1つの大きな魔石がついている。魔石とは魔力の結晶のことである。それぞれの魔道具には魔法が付与されているのだが、強力な障壁魔法を展開できるようだ。ちなみにここで魔道具自体にはその素材によって刻印できる文字数に制限がある。

「ねえ、これってジンがたまに使っているヘンテコな字じゃない？」

「ああ。これは漢字だな。」

『対衝撃』『対魔法』『対銃弾』……、など。

魔人たちが攻めあぐねていた理由も納得できた。

賢者の孫か、それとも別の転生者か。

「行ってみましょう。」

「少年少女が飛び降りたぞ!？」

「いいから行くぞ!」

「あの子達に敵意はなかった。今は魔人だ!」

魔人たちは街の人々を襲い始めていた。知能や意思があるだけ、魔物より質が悪い。女も子ども見境もなく、自分達より幸せそうな人は憎んで殺していく。兵士たちは憤り怒り、必死に立ち向かっていく。

魔人の数は100人ほど。

この国で人工魔人に対応できる人は数人だろう。

『スイード国民に告ぐ！ 私はアールスハイド王国、王太子アウグストゥルフオン・アールスハイドだ！』

「拡声魔法かしら。」

街の屋根の上で呆然と見ていれば、聞き覚えのある声が聞こえた。『我々は魔人を打倒する力を身に着け、この地にやってきた！ 我々アルティメットマジシャンズが王国兵と協力し、必ずや魔人を打倒しよう。』

アルティメットマジシャンズって、なかなかませている。

『そして、魔人たち！ 絶望せよ！ こちらには第2の魔人を討伐した、賢者の孫シン・ウォルフオードがいる！ 万が一に勝ち目があると思うな!!』

魔人は攻撃の手を止め、塔の上に立つ少年を見た。

隣国の王太子と賢者の孫、その直属部隊のご登場である。

「なるほど、いい策だな。」

「どういうこと？」

人々は歓喜し、魔人たちは新たな標的に愉悦した。

多数の魔人が塔の方角へ移動していく。

賢者の孫の学友たちは、2人1組になって各個撃破しているらしい。

「魔人の誘導だ。ずいぶんと自分たちの腕に自信があるらしい。」
「それなら、あっちの方に何かあるのね。」

人々が、逃げていく方向である。

つまり避難先か。

辿り着けば、すでに先客がいた。

「みつけ。救護所だ。」

「愉しそうだねえ、ここは。」

「通さないぞ、ここは。」

2人の魔人に立ち塞がったのは、少年少女。

王太子と同じ戦闘服を着ているし、彼の部下か。

「ひゃっはー、女だ!」

「おい、坊主。どけ。今なら命だけは助けてやるよ。」

「マークは私が守る。」

「オリビアは俺が守る!」

「はっ!!」

「ガハッ!?!」

爆炎が魔人たちを包み込んでその身を焼いていく。

魔力制御を鍛えていて、なかなかの威力である。

「ぐっ、舐めやがってえ……」

「もう超怒ったぞ!」

「くそっ。こいつら、再生してっ!」

「マーク、こうなったらもっと強い魔法で!」

「周囲に被害が出るかもしれないっ!だからっ!」

2人は、頷き合う。

「なんだなんだ、イチヤつきやがって!」

「正義の味方は。全く大変だなア!!」

ピッチフォークを、彼は剣で受け止める。

少女に向かおうとした魔人は、障壁魔法で足止め。

「オリビア、準備できたか!」

「うん! はあっ!!」

「ギャアーツ」

蒼炎と化した爆炎が魔人を焼き尽くしていく。

賢者の孫譲りの魔法だろう。

少年は障壁魔法を、少女は爆炎魔法を発動し続ける。

「はあはあ……」

「クツソがア……ア!!」

「ご、ごめん、マーク。もうっげんかい……」

「オリビア!!」

連戦だったのだろう。

初めての対人戦で緊張感もある。

膝をついた少年少女は、もう魔力が限界だ。

支え合い、互いに守ろうとする。

「くそつ、魔人はほんと……タフだな……」

「でも、逃げるわけには……」

「お前らは絶対に赦さねえ、か、ら、な……」

パンツパンツと、銃声が鳴り響いた。

俺が脳天を撃つたのは、2体の魔人の方だ。

「な、なぜエ……?」

「……本来の魔人は、気分屋なんだ。」

「あんた。あの時の……?」

「そ、その女の子も魔人なの?」

「そうよ。でも、私たちは何もしないから安心して。」

「うん、わかった。」

「……信じるのね。」

「だって、障壁魔法を手伝ってくれただろ? 俺苦手なのに、オリビ

アってばすげえ威力が高くてさ。」

「でも、マークたちのおかげで救護所は守れたわ。」

「だから、ありがとう。」

「……まったく。魔人なのよ、私たち。」

人助けはするつもりは決してない。

でも、誰かを守ろうとする人の邪魔はしない。

救護所を守ろうとして満身創痕となった、騎士たちに話しかける。

「よう、おっさん。気分はどうだ?」

「最悪だ。」

「君たちに任せてしまった、騎士として情けないな……」

「さて、本題だ。憎いか？」

「ああ、憎い。魔人も俺たちの無力さも!!」

「あんた……、何を？」

『力』は使い方次第。騎士のおっさんたちがどう使うかは俺の管轄外だ。」

「らしくないことをするのね、ジン。私は先に行くわよ。」

2人の肩に手を置いて、黒い魔力を渡す。

魔力が溢れ出て、目は紅く光った。

「傷が、治って……」

「まさか魔人化させたのかよ!!」

「そ、それって、大丈夫なの？」

「たぶん時間制限付きだがな。気分はどうだ？」

「感謝する!!」

さらに多くの人を救助しようと、2人は街に繰り出していく。

「行っちゃった……」

「まったく。俺たちは傍観者で。気紛れだけであって、ただの偽善で。別に感謝される立場にないのにな。」

救護所の中へ入る。

『力』を持たず、痛みに苦しみ嘆き、泣いていた。

「シシリー様！ この子の怪我もお願いします！」

「私の夫をお助け下さいい聖女様！」

「あ、あの俺の怪我也……」

「じ、順番に診ていきますから！」

この光景を見ても、魔人の俺は何も感じない。

そして、賢者の孫の想い人。

たった1人で、数百人を相手に1人ずつ回復魔法をかけていた。

「それで。なんで死にそうになるまで、がんばっているの？」

魔力も底を尽きかけている。

治癒効果のある自分の戦闘服を脱いで、手渡してすらいる。

「はあはあ……私、やっぱり戦うのが好きじゃなくて。でも、皆さんを守りたくて。まだまだシン君の隣には立てそうにないけど、私にできることをやりたいんです。」

「そっか。ねえ、お姉さん。名前は？」

「シシリーⅡフォンⅡクロードです。」

「ソニヤよ。私たちは敵でも味方でもないわ。だから、気が向いたから、あなたを手伝うわね。」

「ありがとうございます!!」

「別に。感謝されるつもりはないわ。」

「前回のように、今度は敵として出会うかもしれないしな。」

「それでもです！もちろん、シン君を傷つけたことは許せませんが、それは私個人の問題です。少しでも多くの人を救えるのなら、なんだってやります!!」

「まったく……」

クロードは本当に輝いて見えた。俺たちはクロードによる回復スピードには敵わないが、魔人の魔力総量は非常識的に勝っている。魔人に傷つけられ、魔人に癒されるなんて、なんて非常識的だろう。

そもそも魔人は悪なのかどうか、そんな疑問が人々に芽生え始めた。

「助かった！ありがとうございます！」

「おい、次はこっちだ！ 坊主！」

人間に個人として見てくれたのは久しぶりなので、なんだかむずむずしい。

「聖女様！お願いします！夫を、夫をお助け下さい！何でもしますから……お願いします……どうか……」

付き添いの女性が懇願した。

対して、クロードは暗い顔をするだけである。

「あの人は？」

「……私ではどうしても助けられなくて。魔力が足りないのもそうで

すが、あまりにも傷もひどくて。」

「なるほど。聖女でもなんでもない魔人だが、それでもいいか？」

この世界には、完全治癒魔法なんてものは存在しない。

もしゲームのHPで例えるなら、1ずつ回復させるだけ。

「はあはあ、魔人でも魔物でも……、妻を置いて、死ぬことより、怖いものはないッ！」

「上等、いい度胸だ。」

たぶん、内臓がかなりやられているのだろう。人体構造をある程度脳に浮かべる。膨大な魔力を使って、片っ端から治せばいい。身体の内側に向けて一気に回復魔法を使うべきか。

「魔人による全力の回復魔法だ。気をしっかり持てよ。」

「わか、った……ぐっ」

「あなたっ！」

愛する人の手を握り、支える。

強い『力』を持っている者ではないが、つよい。

「ありがとうございます……、ごぎいます……!!」

まったく、今日は『らしくないこと』をした。

第8話 闇から這い出そうと

オリバーⅡシュトロームに指示された、魔人の集団がスイード王国を襲撃した。

世界各地では、そういうことになっている。実際は元平民100人の独断なのだが、この世界の政治体制も一筋縄ではいかない。魔人を悪と断定することで、絶滅させようとしているのだろう。

つまり、俺たちは世界の敵となった。

「ククツ……アツハツハツハ!!」

「……シュトローム様、少し落ち着いてください。」

腹を抱えて嘔い続ける彼を、ゼストは諫める。

「嘔うしかないでしょうに。魔人の力を過信して、策も弄することなく1つの王国を攻めて、賢者の孫によって無残に果てたのですから。いやはや、実に愉しい死に様。愚かな帝国平民には相応しい末路だと思いませんか!」

感情を見せることのなかった彼が今、感情豊かなのは復讐や愉悦のためだ。遠見の魔法で、今もなお走って逃げ惑う魔人たちを愉悦しながら観察していた。無事に帝都にまで帰ってくるのは、城壁でこまねいていた40人ほどだろう。

「……ローレンス、間近で見た感想は?」

「シンⅡウォルフオード、恐ろしい敵です。俺たちを殺すと言う意味でも、その魔力制御の力量という意味でも。炎の魔法を中心として、即死級の魔法を躊躇いなく放ってきます。」

「……なるほど。前回よりも強くなっているということか。いくら魔法の使えなかった平民達とはいえ、あの12人が来なければスイード王国は制圧できていたはず。」

「賢者の孫、そしてその力を受け継いだ11人。無理に敵対するべきではないかと。」

「だが、ここ魔人領に攻めてくるのは時間の問題だろうな。」

「やはりそう思いますか、ジン様。」

「ああ。あいつらにとって、知性のない災害級の魔物はもう敵ではないだろうからな。だが魔人領を縄張りとした魔物の数は多い。だから今は、時間をかけて連合軍でも作っているんだろう。」

「人間とはいえ、途方もない数と戦うことになるのか……」

「まあ、賢者の孫以外は魔法と剣以外、まだまだ未熟なだけだな。」
まだ15歳。

裕福な家庭で育った彼ら彼女らはまだ経験が浅い。

俺のような、無茶をしない限りそう簡単に強くはなれない。

「魔物ハンターと傭兵の、彼らを呼び戻すことも視野に入れなければなりませんね。」

「あいつら、秘境に籠っているんだったな。」

モンスターハンターのような暮らしを愉しんでいると思う。

まったく、精神的にくるものがある。

俺たちには知性があり非情ではあるが、殺人鬼ではない。

「おっと、そろそろミリアさんの元へ行かなくては。」

彼の興味は別のことへ。

常に座っている玉座から、立ち上がった。

ミリアさんの実験は何度も続いている。

愛があるのかどうか、2人しか知り得ないことだ。

「そういえば、人助けをしたようですね、ジン。」

オリバーが振り向いた。

「俺が何をしようと、もうオリバーには関係ないだろう。」

「それもそうでしたね。」

親子ごっこはとっくに終わった。

愉しみを邪魔する者は誰であろうと叩き潰す、それが本来の魔人である。本能に従うのなら孤高の存在なのである。親子ごっこはすでに終わりを告げ、不干渉を貫いていた。そうした理由はただ一つ。

——殺し合わないため

標高が比較的高くて涼しい気候である。

浮遊魔法を解除して、のどかな高原に降り立つ。

「ここはカーナン王国か？」

「ええ、そうみたい。」

長距離移動を可能とする魔法、ゲートは一度行ったことのある場所かつ憶えている場所でないと思えない。ちゃんと行くべき場所をイメージすることができないからである。憶えているからこそ、俺はアールスハイド王国へいつだって奇襲ができるということだ。

しかしこちらから仕掛けるつもりはない。ここ数日はクロードの実家のある温泉街で過ごしていた。アルティメットマジシャンズもまるで旅行をしているかのように魔人領の隣国を訪ねているらしいのだ。聖女の生まれた街として多くの人で賑わっていた。

その帰りに、面白そうな国があったので降りてみたのだ。

「羊と小麦に囲まれる2つの国よ。隣国のクルト王国とは特に友好関係を築いているらしいわ。」

「博識だな。」

「本を読むことくらいしかやることなかったからよ。」

その境遇をあっけらかんと言ったが、俺に何かを教えられることをどこか喜んでいた。彼女はもう決して不幸ではない。

「なあ。あの羊飼いの、ずいぶん鍛えてないか？」

「時々、羊が魔物化するのよ。魔道具としては極上の素材だけどね。」
「なるほど。」

魔物に溢れている世界では、安心して牧畜もできないらしい。

羊飼いが、魔物化した羊をハルバードで叩き切っている。

「古着屋店以外にちゃんとした服飾店があるし、服でも買うか？」

「別にいいわよ。この服気に入っているし。」

その境遇からか、彼女は贅沢をしない。

まあ、ブラウスとスカートという、ありふれた貴族の服装は彼女に十分似合っている。街で堂々していれば、俺たちはどこかの貴族の婚約者に見えるだけで、見た目だけでは魔人には見られることはない。

「ちよつとクセの強い味ね。」

「あまり食べ慣れない味だろうな。」

「うん、でも美味しいわね。」

羊肉の串焼きを食べ歩きする彼女は、今は普通の女の子だった。

「魔道具の販売店も多いんだな。」

「かなり高価だけどね。でも、織物業には欠かせないもの。」

産業と魔道具は、密接に結びついている。

導師が作成した魔道具は多くの国を豊かにした。

だから、この王国では導師を崇めているようだ。

昨日、導師の孫が訪れたという話で盛り上がっている。

「あの子達も観光をしたのかしらね。」

「一応ここも旧帝国領の隣国だし、あの王太子がここの王に謁見したんじゃないだろうか。知らんけど。」

つまり、戦争は近いらしい。

『緊急警報発令！』

「なんだ？」「なにかしら。」

『クルト王国との国境付近に魔人襲来！総員速やかに避難せよ！繰り返し、速やかに避難せよ！』

「オリバーじゃ……なきそうね。」

「ああ。気分屋だけど、わざわざこの国を選ぶメリットはない。闘争を求めるのなら、1番はアールスハイド王国だからな。」

避難していく人々とは逆方向に歩いていく。

時折り、俺たちを心配するように声をかけられる。

魔人襲来も予想していたのか、兵士の誘導に従って避難は迅速に行われていた。

城壁の下では魔人とアルティメットマジシャンズが戦闘している。魔人は平民の生き残りである。そして恐らく貴族の、金髪の少女と女の子がいたから俺たちはお話に来た。ソニヤの予想通りなら、女の子は王太子の実妹である。

魔道具で自動障壁を展開し、1人の魔人の脅威から女の子を少女が守っていた。

「へへっ、こいつらを人質にして……」

「邪魔よ。」

背中から、蹴り落とされた。

ぎゃあああ、と叫びながら魔人は城壁の上から落ちていく。

「助けて下さったことは感謝いたしますが……、貴方達は？」

「魔人よ。」

「はわわ、魔人さんなのですか!？」

「……しかしどうしてお仲間を？」

冷静さを保ち、こちらの出方を伺ってくる。

『力』はないが、決して臆さない。

「魔人同士が仲が良いとは限らないわ。スィード王国のことも、今回のことも、あいつらが勝手にやってることよ。だから、あいつらが反撃されているのは自業自得。どう、信じるかしら？」

「信じるも何も、この程度の障壁など貴方たちならすぐに壊せるでしょう。」

「そうね。でも、お話をするだけなら問題ないもの。」

「信じましょう、貴方の言葉を。」

「わたしはメイと言いますです!」

「ふふっ、私はソニヤよ。こっちはジン。」

「メイだったら……、私はエリザベートと申しますの。」

こちらに敵意がないことがわかった瞬間に、名を明かしたメイⅡフォンⅡアールスハイドちゃんである。見た目的にもその表情も、まだまだ幼さが残っている。大人びているソニヤとはほとんど同い年であるのに、な。

エリザベートは王太子の婚約者、メイは王太子の実妹であって賢者

の孫の従妹だと言う。防御の魔道具があるとはいえ、なぜアルティメットマジシャンズメンバーは誰も護衛をしていない。ゼストさんやローレンスたちなら容易く破壊して、背後から襲うことなど容易い。

まあ、腐った帝国に命令されたようなことは、もうしたくはないだろう。俺たち魔人は魔人になる前から、光を求めていた。

「それにしても、魔人はみんなあんな強さですか？」

「いいえ。一番弱い部類よ。」

「……そうですね。」

「ソニヤたちも、シンお兄ちゃんといつか戦うんですか？」

「さあな。一番強い魔人は3人とも気分屋だからな。」

少し情報を与えてしまったか。

まあ、俺たちに向かってくる敵は誰であっても潰す。

「今のところ魔人領からは仕掛けるつもりはない、とだけ言っておこうか。隣国がどうするか次第だろうな。」

「魔人の言うことよ。信じるか信じないかは貴方次第だわ。」

「……オグにはお伝えしますの。」

それにしても、あの魔人たちも運がない。

偶然選んだ国に、アルティメットマジシャンズがいたのだ。

轟音が鳴り響いた。

賢者の孫、やっちゃったな。

「魔人を追撃するように、広範囲への爆発魔法か。」

「シンお兄ちゃんすごいです！」

「しかし、これは……」

「大変。小麦畑が吹き飛んでしまったわね。」

「はあ……、オグと一緒に謝罪しなくては……」

勝手に隣国に加勢して、コラテラルダメージをもたらしたのだ。国民にとっては正義の味方で英雄の孫なのだろうが、非は完全に賢者の孫にある。それでもたぶん許される。非常識なことを繰り返し、周囲へ影響を与え続けるあの転生者はこの世界ではまさに

「まさに魔王ね。」

「魔法使いの王です！」

「勇者じゃないのかよ。」

第9話 光

俺が目覚めた時、溢れんばかりの魔力を持っていることを感じた。嬉しかった。学院でSクラスに入らず、奴にシシリーの心も奪われた。黒髪の魔人に、今いる場所は帝国だと告げられ、俺が魔人化したことを伝えられた。ただ、嬉しかっただけ。屋敷にはシュトローム先生もいたが、昔と違って何も話してくれなかった。

腰を低くしているローレンスに、手を翳す。

「全てを焼き尽くす炎よ！ この手に……あぶねえ!？」

「へえ、避けたか。」

「貴様、俺を殺す気か！」

「甘いな。そう簡単に魔人は死なないだろ。」

それから、奴を倒すために訓練することになった。すぐにでも飛び出した気持ちもあつたが、自分の弱さを自覚させられた。諜報部隊の奴らとの実戦形式だったのだが、全く歯が立たない。シュトローム先生以外の家庭教師や学院の教師から教えてもらったことなど、全く役に立たなかったのだ。

「はあはあ、なんで、お前らは……強いんだ？」

「なんでって。経験の差だろうな。俺もまだまだだけど。」

ローレンスたちが魔人化してからは、力の差は歴然だった。魔人に再生能力があるからといって、ゼストさんに無表情のままナイフで切り刻まれることは一種のトラウマとなっている。どれだけ泣き言を言っても、手加減なんてしてくれない。

誰も訓練では、甘えさせてくれなかった。

俺をちゃんと見てくれるって実感していた。

「なあ、ローレンス。どんなことをしてきたんだ、教えてくれ。」

「おいおい、ずいぶんと興味津々だな。」

「いいから、教えてろ。」

「なんでさ……。まあ、俺たちは死線をくぐってきたんだ。」

「例えは？」

「そうだなあ。屋敷や隣国に潜入して、時には命からがら逃げだしたこともあった。この手で何度も暗殺をやってきたよ。ほんとう、今俺たち全員が生きていることが不思議なくらいだ。」

ローレンスが見ている、タコのできた手。

魔法ばかり鍛えてきた俺の細い指とは大違いだ。

こんな甘えてばかりだった俺が奴に勝てるはずもない。

「隊長に報いるために訓練に励んだ。……、悪いが、ここからは愚痴になるぞ。俺たち諜報部隊は帝国貴族共から蔑まれていたんだ。任務を達成して生還してまず掛けられる言葉は罵声だ。俺たち平民は所詮、使い捨てなのさ。」

「……ずいぶんと無能な上司なんだな。」

「ああ。ゼスト隊長は変わらず最高の隊長だし、俺たちを有効活用してくれるシュトローム様は最高の主なんだよ。だから、今の生活は満足している。」

たった1ヶ月だが、こいつらが優秀なことは知っている。

たとえ生まれが平民でも、こいつらは強い。

「そういうえば、帝国が腐敗していたことは知っていたのか？」

「まあな。いつクーデターが起こってもおかしくはないと……、父上は言っていた。」

帝国貴族は平民を制することができなかった。

有能なローレンスたちを重宝できなかった。

滅んだのは、自業自得だ。

「お前ってアールスハイド王国で貴族だったんだろ？」

「ああ。俺は兄がいる限り家を継ぐことはできないが、な。」

「やっぱり、まだそういう貴族の格式はあるのか。」

アールスハイド王国は、平和で豊かな国で、馴れ合いの多い国だ。いつからか、王国の政治が甘いと思い始めた。守られることを良しとして、ほとんどの貴族はその地位に甘んじる。兄上は家を継ぐためとはいえ、剣術も魔法も嗜み程度にしか習わないのだ。今思えば、それは甘えだ。俺はローレンス達に『力』を思い知らされた。

『力』を身に着けてこそ、地位を誇示すべきだと俺は思う。
兄よりも俺は優秀な存在になるつもりだ。

「よう、気分はどうだ？」

「黒髪……」

扉を開けてやってきた黒髪の奴。

ジンだよ、と苦笑いしながら初めて名前を言う。

会った時より変わったな、こいつ。

肩の荷が降りたような気がする。

そう思うのは俺自身がそうからなのかもしれない。

「ずいぶんとしごかれたみたいだな。」

「まあな。お互いボロボロだな。」

この環境と魔人としての『力』があれば、いつか奴を倒せる。俺は日々強くなっている。シンⅡウォルフオードとシシリー、そして兄を見返すことができる。

「なあ、ジン。どうしてボロボロなんだ？」

「……親子喧嘩。」

「なんでさ。」

「シユトローム先生と？」

「ミアさんの代わりにぶん殴ってきただけだ。……それでさ、カートはさ……『力』ってなんだと思う？」

「そんなもの、強い魔法……だろ？」

俺の頭の中に、疑問が芽生えた。

そういう感情は、久しぶりな気がする。

「剣術や体術も『力』だよ、な。」

「ああ。魔道具を使って戦うと言われる、導師もいるしな。それに、言葉も『力』なんだ。」

「……言葉が？」

「俺の故郷の政治は言葉で戦っていた。王も貴族もない、民主制だ。」

「み、民主制が本当に実現しているのか？」

「なんだかんだいって、帝国は貴族が政治を行っていただけだからな。」

「ああ。成り上がり者なんていくらでもいる。」

「魔物や人と戦える『力』が全てだと思っていたよな？」

「そう、だな……」

福祉、医療、科学、義務教育、……そして魔法のない世界。俺もローレンスも異世界の話に聞き入っていた。ソニヤがジンと話すことを愉しんでいるのは知っていたが、未知なる世界は想像以上に驚きの連続である。この目で見てみたいとも思った。

だからこそ思う。

この世界にも、そんな愉しそうな国ができたらいいなと。

「努力すれば認められる国か……、愉しそうだな。」

「俺たちみたいな、『ネズミ』が生まれなくて済むのか。」

奴を魔法で屈服させるだけじゃなくて、アールスハイド王国より良い国を作りたい。俺の歩んできた道を否定した奴らを見返したい。シシリーが振った男は途方もなく素晴らしい男だって後悔させたい。

そんな国を、作りたい。

——世界が、いや視界が変わった？

「カート、お前。目が戻って……？」

「……これは」

「たぶん、魔人化のコントロール。お前が初めての实例だ、カート。」
（そもそも魔人化というのは、魔力の暴走状態。自分の感情を制することができたのなら、オンオフができるのか。それなら、『魔人』は決して『魔物』ではない。『人間』のままだ。）

「ふっ。ローレンス、ジン。俺の勝ちだ。」

「ぐっ……」

『勝つ』って、こういうことなんだな。

魔力を増減させている2人を見て、誇らしい気分だ。

貴族や平民なんて関係ない。

俺が求めていたのはライバルであり親友なのだろう。

「みんなっ！ ミリアに赤ちゃんができたって!!」

「なにっ!?!」

「お前ら、焦りすぎだ……ったくっ」

飛び込んできたのはソニヤ。

ミリアっていうのはシュトローム先生の奥様だ。

閑散とした城の中で、彼女の部屋は暖かい。

「俺、こういうの初めてだ。」

「俺もだ。まさか闇に生きてきた俺たちが立ち会えるなんてな。まさかに光、か……」

少し、お腹が大きくなっている。

こうして、子どもは育っていくんだと思う。

「義父さん。」

「……なんでしようか?」

「もし生まれてくる子供が魔人じゃなかったら、どうする?」

「……魔人じゃなくても、強い子に育ってくれば父親としては本望でしょうねえ」

「シュト……ローム、様……、目が……」

「長い間、待たせてしまいましたね。愛するミリア」

「はいっ!!お慕いしております、オリバー様っ」

シュトローム先生の心境の変化か。

先生をいい意味で変えた奴は、誰かわかっている。

シュトローム先生も、ボロボロだしな。

「オリバー様の子が、私に……」

「ええ。私たちの子どもです。」

貴族だと、乳母に任せつきりになるんだよな。

俺もそうやって育てられた。

なんだか、寂しいな。

「うんうん。ミリア、お母さんになるんだね」

「今、私は幸せです……」

幸せ、か。

親の言う幸せばかり追いかけて、自分で考えたことなかった。

「……ごめんな、カート。いろいろ迷惑かけて。」

「気にするなよ、もう過ぎたことだ。」

「なあ、カート。家には戻らないのか？」

ジンはもう親に会えないんだったな。

こいつが異世界に渡る方法を探していることは知っている。

「立派になったら、会うさ。」

「そうか。だったら、俺もそうする。」

共通点は、魔人であること。

『傷』を分かち合って、前を向いて歩こうとしている。

この人たちと一緒に、これから生まれる子供の行く末を見てみたい。

第10話 家族の1人として

ずいぶんと時間がかった。

確かに多数の国が連合軍を作るのは容易くはない。

まあ、そのおかげで平和な時間を過ごせた。

魔人に対抗することができるのはアルティメットマジシャンズの12人だけである。しかし魔法について研鑽しているだけで、対人戦の経験は俺と同じように多くはない。死線をくぐってきたローレンスたちこそが真の強者である。そして俺やソニヤ、オリバーに魔力量で対抗できるのは、賢者や導師と転生者だけだろう。

だが、俺たちは守りに徹する必要がある。

「ローレンス、連合軍はどうだ？」

「……とにかく、数が多いぞ。アールスハイドの軍だけで、8万以上。もちろん他の隣国も入っているし、イース神聖国やエルス自由商業連合国まで連合軍入りしている。」

真つ暗な世界、映える月の下でずいぶん苦しそうだ。

「まさしく、魔人は人類の敵だな。共通の敵を得たことで結びついたんだな。」

数十万人で、たった12人の魔人を討伐しに来る。

もちろん今はミリアさんは戦うことはできない。

個人の戦力は俺たちが圧倒的に上だ。だがしかし、人間の心がまだ残っているからこそ、数十万人の人間と戦うことは精神的に追い詰められていくだろう。そして、いつか魔人という存在は、『殺戮機械』と化す。

「……帝国で、俺たちは諜報部隊だった。この手で何人も手にかけてきた。でも、好きでやっていたわけじゃない。俺たちは帝国を滅ぼしたただけだ。……これから生まれる子も、世界の敵なのか？」

悪性の敷かれた帝国では異端だったただけだ。

オリバーの復讐を果たしただけだ。

この数ヶ月、俺たちは帝国以外を決して襲っていない。

それが今では、世界の異端者にまでなっている。

人間にいわゆる犯罪者が現れるように、魔人の中からスイード王国で無差別殺人を工作した奴らがいた。俺たちは部下でもなんでもない彼ら彼女らに自由意思を委ねてしまった。そうして、俺たちは間違えた。

「ちゃんと話して。魔人という異種族を分かってもらえて。みんなが手を取り合う、そんな平和な世界となつて。そんなハッピーエンドを目指して。……降伏するか？」

「はっ。降伏して、無事に済むならな。」

魔人の『力』を恐怖し鎖をつけられ、小さな命を人質を取られて、一生飼いならされる。そんな未来はまっぴらごめんだ。

魔人になって強さを得ようとして人間離れして、また人間に戻ろうとして、今は魔人という1人の人間として生き抜くことを選んだ。いつだったか、俺は賢者の孫を中途半端だと評した。世間の波に流されて生きてきて、この残酷で美しい世界に転生した俺自身がまさしくそうだった。

迷い続けていたし、これからも何度も間違える。

「それなら、生きるしかないだろ。戦争なんて結局、互いの意見のぶつかり合いだ。ローレンスたちは自分の意見を主張したくて、帝国と戦った。だから俺たちを殺しに来るのなら、抵抗するしかない。生きることが諦めたくないから、腹をくくるしかないだろ。」

「ははっ、達観してるな……、ほんと。」

ローレンスと会うのはもう最後かもしれない。

今はもう酔うことはできないが、グラスを掲げる。

「未来ある子どものために。」

そんなクサイ台詞を交わし合った。

絶対に、また会おう。

いつものように玉座に座ったままだ。

オリバーの紅い瞳からは涙が流れていた。

ゼストさんはそんな彼の側で立っている。

「ミリアさんに付いていなくても？」

「ええ。ミリアも今は、心地よさそうに眠っていますから。」

「そうか。」

「ジン。私は私が憎い。」

「ああ。知ってた。」

「気づいていたんですね。本当に憎むべきは帝国ではなかった。アリアを守れなかったことも、ミリアや生まれる子どもがこれから苦しむことになるのも、私のせいなんです。」

「……ああ、そうだな。」

否定はしない。

魔人オリバーの果ては、父親だった。

「もう、遅いのでしょうか？」

異空間収納から取り出す、弦楽器。

奏でる曲は、『G線上のアリア』。

「緊張」と「緩和」、「切なさ」と「優しさ」、「緩」と「急」といった対比が、静寂の城の中に響き渡る。今まで、彼の心に少しでも安らぎを与えることができるのなれと思ひ、いくつもの前世の曲を聴かせてきた。

「いい曲ですね。ジンが生まれた世界が本当に羨ましい。」

「まだ遅くなんかないぞ、義父さん。」

「……そうでしょうか、ジン。」

「義父さんの子どもはこれからちゃんと守れるだろ。俺も義兄として全力を尽くすつもりだ。」

「立派な義兄を持って、私たちの子どもも幸せですね。」

『力』を求めて闇雲に研鑽し、非人道的な実験もしてきた。

人としての安らぎを求めるために、親子ごっこもしてきた。

お互いに殺し合わないために、一度離れた。

そして、親子喧嘩もした。

親子の愛が俺たちにあつたのかどうかわからないが、お互いに死んでほしくないとはずっと願っている。だからたとえ世界を敵に回そうとも、家族を守りたいと思う。人の心にまた歩み寄ろうとしているし、もう魔人という人間として生きることが躊躇わない。

魔人となつた今でも、人間らしさはちゃんとある。

「ゼストさんはどうします?」

「私の主は、シュトローム様が最初で最後です。この命をシュトローム様のご家族のために捧げるつもりですよ。しかしアベルやローレンスたちについては、彼ら次第ですがね。」

「ゼストさんみたいに部下思いの人、そうはないと思う。あいつらも今の生活を満足しているよ。ローレンスたちも最後まで付いていくつもり、だよな?」

ローレンス、カイン、アベル、サイクス、ダンテ、リオネル、フィン。決意を固めた彼らが謁見の間に入ってきた。その出自も、性格も趣味嗜好も異なるメンバーだが、ゼストさんへの忠誠で繋がりが合っている。

「……そうですか。」

「ゼスト、そして皆さん。こんな私のためにありがとうございます。妻共々、これからもよろしくお願いします。」

「「はっ!」」

たった8人で、唯一無二の家臣たちだ。

義父さんは恵まれている。

「じゃあ、行ってきます。義父さん。」

「ええ、行ってらっしゃい。」

お互いに慣れない言葉だ。

初めての、おかえりとただいまをちゃんと言おう。

貴族が埋葬される墓地と違って、平民の集団墓地だ。

その方が幸せだと言う。

腰をつけて座り込んでいる女の子がたった1人。

「ソニヤ。」

魔人として、いやありのままの人間として生きることが彼女も選んだようだ。普通だと偽ることはもうしない。

「ちよつと、お母様に会いたくなつたの。」

「俺もちゃんと挨拶しないとイケないと思つて。」

手と手の皺を合わせる。

線香もお供え物もないけどな。

「……私ね。この世界のことを嫌いな。お母様を苦しめたこの世界が嫌い。」

「ああ。残酷な世界だ。だから俺たちは、拒絶した。」

「でも、ジンやみんなと会えたことは感謝しているわ。物語のようで、絵に描いたようで、幸せな世界をくれたの。私があなただを好きになる瞬間を今でも覚えている。ちゃんと私を見てくれて、1人の女の子として見てくれる男の子が現れてくれて。本当にドキドキしたの。」

強大な魔力に導かれるように辿り着いた塔ですすり泣いていた女の子は、今では幸せそうに微笑む。彼女の心に少しでも安らぎを与えられることができるのならと思ひ、前世の物語を聴かせてきた。外の世界を恐れている彼女の小さな手を取つて、狭い世界から連れ出した。

世界を超えて彼女に出会えたのは、奇跡だ。

「ソニヤが幸せだったら、俺はそれで幸せだからな。」

「またそうやって自分を誤魔化すのね。」

「……え？」

「異世界から1人でやってきて、ジンも辛いこといっぱいあったと思う。あなた、たまに感傷的になるのよね。でも、不安だとか怖いことだとか、私を安心させたいからってジンはいつも隠そうとするんだもの。」

「……よく見てるな。」

「だって、あなたのお嫁さんですもの。」

たぶん、俺たちはちゃんとわかってくれる人を求めていた。

ちゃんと理解してあげられる人を求めていた。
だって人の心は、怖いから

「私も怖い。私も同じなのよ。あなたがいなくなってしまうことが一番怖い。だから一緒に、がんばりましょう。」

「ああ。生きることが頑張ろうな。」

「うんっ。もっともっというろんなことを教えてほしいわ。」

この戦いが終わったら……、なんてことは言わない。
この恐怖との戦いは決して終わることはない。

第11話 問い

各方面から、アルティメットマジシャンズ数名ずつを加えた、魔人討伐連合軍が進行していた。後方支援も含めれば、その数は数十万人に上る。好都合なことだが、連合軍はまだ魔人領に巢食う魔物に足止めを受けている。帝都に近づくにつれて、災害級の魔物も多く巢食っているのだ。

こちらの本拠地である旧帝都へ入る事すらさせないように、俺やローレンスたちで各隊の進行方向の市街に防衛へ向かった。

最も怖いことは、アルティメットマジシャンズによる空中からの帝都奇襲である。もしその兆候があればゼストさんが信号弾を打ち上げる手筈となっている。そして、転移魔法ゲートによって急行する。アルティメットマジシャンズに対応することのできるソニヤやオリバーがいるとはいえ、ミリアさんが傷つく可能性をゼロに留める。

まあ、ゲートを使って奇襲される可能性はない。
彼ら彼女らが帝国に行ったことがないからだ。

「出て来い、魔人!!」

先遣隊なのだろうか。

たった50人ほどの一般人並みの実力者が街に入ってきた。

「先遣隊……、それとも囷か?」

建物の陰から出たのは、15歳の少年。その風貌からは魔人には見えないうが、すでに俺の事は伝わっているらしい。宗教国家らしい装備の兵士50人が、一斉に槍を構えた。身体能力強化を使っていないことから察するに、個々の戦力は災害級を倒すことすらできない程度のようなだ。

「おい、坊主! 他の魔人はどこにいる!?!」

「別に。ここは俺だけで十分と判断したただけだ。」

「舐めるな!!」

魔人より激しい感情で激昂した。

先遣隊にしては冷静さの欠片もない。

沸点低すぎなのでは、と思いつつ周囲を探る。

「皆の者、突撃だ！ 賢者の孫などではなく、我々こそが神の御使いであることを示すのだ！」

「「おおーっ！」」

魔法で戦うのかと思いきや、一直線に向かってきた。

「手柄が欲しいだけなのかよ……」

魔人は再生能力がある上に、身体能力も高い。

即死級魔法で対抗するのが、セオリーのはずだ。

「ッ!」

「アアッ!」

そんな彼らは俺の前で罨を踏んだ。

高威力の雷の網によって彼らは倒れ伏す。

「設置型の雷魔法、サンダーウェブだ。わざわざ罨にかかってくれるとはな。」

「な、なにをやっているんだ!」

「いや、お前が命令したんだろう。突撃って。」

「グッ……」

一発の弾丸によって、彼の肩から噴き出す鮮血。

その痛みで彼はすでに戦意喪失である。

「はあー……、ここにいと危ないぞ。」

「な、なにを……?」

俺は空を見上げて魔法を放つ。

範囲内にいる対象の、重力加速度 g の値を大きくするだけだ。

「安直な名前だが、グラビティ」

「しまったっ!?! みんな、大丈夫か!?!」

「一体どんな魔法なの!?!」

数十人の兵士が落ちてきて、足を骨折。

ずいぶん呆気ない。

「ていうか、数十人が飛んでくれば丸見えだ。そう簡単に奇襲なんか

できるかよ。」

浮遊魔法を発動しているのは賢者の孫だけだ。だから、浮遊させられているだけの兵士の意表つくことは容易かった。ジェットブーツやバイブレーションソードという魔道具を装備しているだけで、魔法や魔道具の扱いはまだまだ素人だ。

咄嗟に風魔法で対応できたのはアルティメットマジシャンズメンバーだけだ。

「さて。どうする、賢者の孫？」

「俺たちが相手だ！」

賢者の孫を先頭に俺の前へ降り立った。

12人全員ここにすることは喜ばしいことだ。

「シシリーたちは、皆を頼む！」

「はい！」

どうやら女性陣は、兵士の救護に向かったようだ。

「一応聞くが、降伏はする気はあるか？」

「ないぞ、王太子様。……その100人ほどのお荷物を抱えて俺と戦うのか？」

「この人数差なら、守りながら戦うこともできるぞ？」

「怖い怖い……」

表情には出さないが、ゲートを使って避難させるまでの時間稼ぎはしているようだ。

「まあ、待つてやるよ。別に俺は殺人鬼じゃないしな。」

「……お前はやっぱり魔人の味方なんだな。」

「ああ。譲れないものがあるからな。……ていうか、全員ここにいていいのか？」

「なんだと？」

「まさか……」

「アールスハイド王国、今はザル警備だろうな。」

そう言いつつ、転移魔法であるゲートを開いてみせた。

一度行った場所ならどこにでも行けるとい魔法だ。

「「ゲート!?!」」

「最近、いろいろな国の旅行を満喫させてもらったぞ?」

その危険性は、使用者ならよくわかることだ。

「そんな!?!」

「卑怯でござるよ!」

「オーグ! アールスハイドにゲートを開くぞ!」

「いや待て! 必ずしもアールスハイドに現れるとは限らん!」

「でも! オーグはメイやエリーが心配じゃないのか!?!」

「あいつらには護衛もいる上に、できるだけの魔道具を渡している。だが、ツールは一応向かってくれ。」

「は、はいっ!」

その動揺に、内心ほくそ笑む。

アールスハイド王国は彼ら彼女らの故郷であり、家族がいて友達がいる、それぞれに大切な人がいる。そのアールスハイド王国が魔人に襲われてしまうかもしれないという恐怖が、冷静な判断力をなくしてしまっていた。

まだまだ15歳ということだ。魔人領に入った後に一度アールスハイド王国に戻って、お誕生日会をしていたらしいし、なぜか2人は魔法少女服を着ているし。魔法の扱い方を重点的に鍛えただけで、熟練の騎士や戦士よりずっと強いと勘違いしている。俺も魔力量に頼らなければ、決してローレンスたちには勝つことはできないのだ。

ともかく、本当に戦争をしに来たのかと疑問に思う。

「ところで、賢者の孫。この世界で竜に会ったことはあるか?」

「……何の話だ?」

「海の向こうの秘境から竜を……、いや魔物化した『恐竜』をゲートで連れてきた。」

「お前、まさか他の軍に!?!」

「ゲートをそんなことに使うなんて……」

「……いや、お前らはゲートをなんだと思っただけだ？」

「いつでもどこでも駆けつけられるし」

「朝、寝坊しても困らないし！そんな魔法だよ！」

魔法少女服を着た2人組がそう言うが、俺は溜息をつくしかない。賢者と導師や、実年齢40歳超えの賢者の孫は、一体何を教えていたのだろうか。

「習った通り、魔法は使い方次第だろ。朝寝坊した時に遅刻を防ぐこともできるし、他にも物の輸送にも役立つ。その反面、どこへだって魔物を送り込めるし、簡単に重要人物の暗殺だってできる。そう考えるとゲートって便利な魔法だけど、恐ろしい魔法だろ。さて……、ここにいるメンバーは災害級を倒せるらしいが、災害級の肉食恐竜を一般兵が倒せるかな。」

「は、はやく助けに行かないと!?!」

「だから、お前はここで私たちを足止めをしているのか?」

「流石、王太子様。俺1人で全員相手にするには骨が折れるというか、心が痛む。俺は魔力だけが取り柄の魔人なんだ。俺も戦争のことを何も知らない甘ちゃんだ。まあ、お前らが今まで戦ってきた人工魔人とは、……俺は一味違うぞ。」

魔人特有の黒い魔力を発する。

魔力だけで、1つの街を滅ぼせる存在なのだ。

「なん……だ? この魔力は……?」

「残念ながら、まだまだ魔人の本気を知らないんだよ。ガキども。」

「今までの魔人とは違うということか!?!」

「当然だ。その気になれば、ゲートで王都に移動して単騎で核爆弾と化せる。『チートでバグで最強』の魔法使い、それが本来の『魔人』という人間だ。だが、そんな魔人の中でも俺たちは思慮深くて温厚だったんだ。何度蔑まれても耐えてきたし、今では全員が魔人の力をコントロールしている。——導火線に火をつけてしまったのは、いつでも『国』だったんだ。かつてここにあった、帝国とかな。」

彼ら彼女らは苦虫を噛み潰したような表情をする。スويد王国を襲撃した人工魔人たちの行動の意図を誰も把握していなかった。

魔人の代表である義父さんを疑っていた。だから、魔人を敵として世界は見なしてしまった。俺たちはあくまで帝国の敵だった。魔人は世界の敵になった。

別に世界征服をするつもりもなかった。もし『力』による恐怖で世界を支配すれば、それはオリバーたちが憎んだ帝国と同じことをすることになる。最強の魔法使いとなって強い『力』を得た俺たちがただひたすらに求めていたのは『安寧』だった。

みんなが安心して生きることが渴望している。

「なあ、お前らが正義の味方って誇れるのか？」

「くっ、化け物が！ 戯言を!!」

「よせっ、ユリウス!」

微細振動する剣が振るわれ、右腕が斬られる。

やはり生物には危険すぎる武器だ。

人間と同じ、紅い血が噴き出す。

「あっ……」

「ちやんと、痛いんだぞ……?」

筋肉質の少年から罪悪感に染まった顔を向けられる。

この緊張感に彼は耐えられなかったのだろう。

「1つ、スويد王国では人命救助をした。2つ、さっきのイス神聖国の兵士も誰1人殺してはいない。3つ、ゲートでお前らの家族を傷つけることをしようとするな。」

俺はすぐに、アールスハイドへ転移できるのだ。その気になれば、いくらでも非人道的行為を行うことができる。だがしかし、帝国のよくな非人道的な行いはできる限り選びたくはない。そうしてしまえば、魔に吞まれて人の心をまた失うことになる。

そしていつしか、大切な人たちを傷つけてしまう。

「ほら、どうするべきか話し合っていぞ。若人ども。」

そして彼ら彼女らに、不和が生じ始めた。危険因子である魔人は討

伐すべき、そうでなくとも捕縛すべきだという声もある。対して、ス
イード王国で助けたカップルには完全に敵意は感じられないし、もは
や賢者の孫の嫁に至っては、魔人領進行をやめようと言ってくれてい
る。

「だ、だがっ、みんなを襲っているじゃないか!？」

「魔物を誘導したのはあなたたちなんでしょう？」

「まあな。運よく、旧帝国領には魔物が棲みついていてるし。魔力に惹
かれる魔物を、魔人である俺たちが誘導するのは容易いことだ。
元々、肉食恐竜は増えすぎた魔物を減らすために投入した。もちろ
ん、ゲートの使い手は俺以外にもいるぞ。……だがしかし、旧帝都に
俺たちが留まったままで、中心地ちゃんと魔物を集めていたら？」

彼女らはお互いに顔を見合わせた。

年相応に、迷い始めていた。

間違えることを恐れている。

「もう一度聞いてみようか。——なあ、俺たちは悪なのか？」

「「……………」」

時は、残酷に過ぎていく。

第12話 ステップバイステップ

弄した言葉に戸惑い、戦意を失っている。やはり年相応に優しく、割り切れないということだ。アールスハイド王国は、15歳で成人扱いなのはやめた方がいいと思う。各国の議論で俺たちは悪者と決められているのだから、たとえそれがまちがっているとしても、軍属なら納得しなければならぬ時はある。

「さて。今から俺たち魔人が行うのは、道理にかなった正当防衛だ。」
俺に対して戦意のあるメンバーはそう多くはない。

魔人を人間と認識したことで罪悪感に染まっているメンバーがいる。それでも、戦うことを選ぼうとするメンバーがいる。クラスメイトという、アルティメットマジシャンズ12人の関係は、脆いものだった。

「……オーグ。みんなを連れて、他のところへ。」
「いいのか？」

「ああ。こいつは俺が引き受ける。とりあえず今は、災害級の魔物を討伐に専念しよう。みんなもそれでいいか？」

場数を踏んでいるだけあって、貫禄あるなど感心する。
標的を魔人から、魔物へと変えたのだ。

何とか持ち直した彼女らは、各自ゲートを開いた。

「規格外のお前ならやれるさ。健闘を祈る。」
「ああ、やってやるさ。」

賢者の孫の肩を軽く叩き、王太子様もゲートへ。

「シン君、がんばってくださいー！」

ここに残ったのは賢者の孫とクロードの、たった2人。クロードは見届け人ということだろう。アルティメットマジシャンズがまた12人で心から笑い合えるのだろうか、そんなことは俺の管轄外だ。

まあ、本物の友達なら仲直りするだろう。
「さて。始めるか、転生者ー！」

「お望み通り。1対1で戦ってやるよ!!」

お互いに一番に脅威なのは、転生者である。

「殺す気で来いよ!」

「当然だ! やっぱりお前がいるとこっちは迷惑なんだ!!」

「いろいろと迷うのは、年相応で別にいいじゃないか。」

蒼炎がぶつかり合って相殺。

さらに、浮遊魔法で距離を取る。

お互い無詠唱で即死級魔法をポンポンと放てるのだから、武器を用いた近接攻撃はしない。知識チートという点ではほぼ同条件である。だから、この世界で身に着けた『力』をぶつけ合うことになるだろう。

どれだけ強い意志を持っているかで勝負は決まる。

「もし俺が勝ったら魔王の称号は俺が貰おう。」

「欲しいんだつたらやるよ、中二病!」

「まじかよ、無自覚系中二病!」

1発で街を破壊できるような、炎や雷が空中で飛び交う。お互いに自動治癒は欠かせなかった。

「賢者に、導師に、ずいぶん恵まれた環境だったんだな!」

「まあな! それで、お前はなんで魔人に付くんだ!」

「がはっ!」

魔法を切り裂いて白い炎の槍が、俺に刺さる。

赤から蒼、そして『白炎』へ。

超高温の魔法は、竜人の身体でも苦しいものだ。

「はあはあ...」

死を目の前にして、精神を蝕む。

お互い平和な日本を知っているからこそ。

お互いに、集中力に綻び。

(俺たちの今やっていることは一体何なんだ?)

言い訳したくて、戦いから逃げたくて、疑問を抱いてしまう。俺は転生して弱音を吐いても立ち上がってきた。

それは、なぜか。

「……なんでって、大切な家族だからな!!それも前世の両親に負けないくらい大切なんだよ!どんな犠牲を払っても幸せにしてやりたいと思うのは!俺はオリバーとミリアさんの義息子で、あの子の義兄で、そしてソニヤの1番『大切』だからだ!!」

俺は水の槍を撃ち込み続ける。

賢者の孫は障壁魔法に切り替え、防御に徹した。

「家族……。くっ……。俺は、……。デスクワークだけで人生を終えるはずの俺が、この世界の未知に触れて楽しかった。その『力』が誰かの役に立つんだっていい気になった。本当は戦いたくなんかない。でもオーグたち、爺ちゃんと婆ちゃん、そしてシシリーを守るためなら戦うって決めたんだ!」

「そうか、守りたいのか。一方的だな、ほんと。俺の奥の手、見せてやる。」

ポケットから出すのは、『魔石』。

魔力の結晶を噛み砕く。

「やべえ、あいつの魔力がっ!!」

異世界の魔法、その障壁魔法で耐えられるかどうか。

「シシリー!障壁魔法を展開しておけえ!!」

求めるは、最強の爆裂魔法。

莫大な魔力量を限界ギリギリまで使い果たす。

つまり、死を目の前にするということだ。

「別に俺が魔力不足で倒れても、ソニヤが拾ってくれる。だって、俺がソニヤを守るように、ソニヤが俺を守ってくれるからな。それが、俺たちとお前たちの違いだ。」

この世界に来て彼女に出会えた奇跡。

「空蟬に忍び寄る叛逆の摩天楼。我が前に訪れた静寂なる神雷。時は来た!今、眠りから目覚め、我が狂気を以て現界せよ!!」

黒い魔力が渦巻き、1つの魔法陣に吸い込まれていく。片手を翳せば、夜に星が輝くように魔力が煌めいた。

「あの詠唱、どこかでっ!？」

「穿て!——エクスプロージョン!!」

ほんの一瞬、風が止まる。

爆音が、魔人領に響き渡った。

声すらかき消し、太陽のごとき爆炎が空に生まれる。

着弾したのは魔力障壁。

そこを爆心地として、空中に爆炎の球体が創り出された。

「シン君、いやあ!!!」

クロードは拒絶する。

耐魔の戦闘服をほとんど焼き焦がし、重傷患者が地面に落ちていった。

「シン君!シン君!!シン君!!!」

戦地において自分自身の戦闘服を脱いで彼に被せて、クロード自身も必死に回復魔法をかけ続ける。涙を流しながら、唇を噛みできるだけ多くの魔力を捻り出しているが、足りない。

「シン君を助けられるなら、守れるのなら。私、なんだってやる……」
魔人化した。

その『力』なら、彼を救えるだろう。

「……シシリー、ごめん。」

「愛していますから、シン君。」

「ありがとう……あい、してる……」

2人の涙が、俺が歩くスピードをどんどん落とす。

もちろん、今ここでこの2人を殺すことなど容易いことだ。俺たちの未来のためにそうしなければならぬとも思う。

「お前らは……う？」

2人の実力者が、立ち塞がった。

ちゃんと止めてくれたことに喜びを感じた。

「……シンが勝てなかった魔人に、決して儂らは勝てんじやろう。儂らはとんでもない魔人を敵に回してしまったのじゃ。あいつよりずっと強い魔人をな。」

「今はしっかり休みな、シン。」

「じいちゃん……、ばあちゃん……にげて。俺はだいじょうぶだから。」

家族を安心させたいと思うのは、家族を愛しているからだ。

「それで、何が望みだ？」

「どうか、この子達だけは見逃してほしい。」

両膝について頭を下げる、お爺さんとお婆さん。

年老いてなお輝きを見せる、賢者と導師。

「爺さん婆さんはさっさと隠居しな。——お互い家族を大切にしような、転生者。」

涙を流して生を喜ぶ、1つの家族。

普通の家族だ。

それはとても眩しく見えた。

「はあ……」

勝った喜びは感じない。

虚しい。

ゲートですぐ帰れるし、浮遊魔法だって使っている。

でも時間を噛みしめるように、ゆつくりと歩く。

「おかえり、ジン」

「……ただいま」

雪のように綺麗な銀色の髪と、ルビーのように輝く瞳。

小さな手を、異形の手が優しく包み込む。

そうして、歩調を合わせて歩く。

俺が感傷的になっていていることくらいお見通しなのだ。

「私はいなくならないから、大丈夫。もしあなたがどこかへ行っても探しに行くから。」

また大切な人を失うことを俺は恐怖している。生きると言うことを異世界転生というものは、前世の繋がり全てを捨ててくるということだ。そのトラウマは時に蝕み、甘えるということを踏みとどまらせる。

「ほんと、嬉しい……、幸せ者だ。もうソニヤなしでは生きていけない。」

「それは私も同じよ。」

「ごめん、重くて。ごめん、面倒な男で……」

「いいえ、足りないくらいだから。もっともっと愛していいわよ。」
支えていたつもりだったのに支えられていた。

世界を拒絶し、愛に飢えていた少女はもういない。

「ミリアやみんなが待っているわよ。」

「ああ、行こう。」

手招きしている家族たち。

隣の女の子は、いつのまにか女性へ成長していたらしい。

「ありがとう、ソニヤ」

「どういたしまして。」

身体、魔法、知識。

借り物だらけの俺だけど、この感情だけは『本物』だ。

『全ての魔法は愛から生まれた』

そう、ミリアのお母さんは言っていたらしい。

大陸とは離れた場所に、1つの島がある。かつて秘境と呼ばれていた島は、大陸とは異なる生態系を持っていて人の住めるような場所ではなかった。やがて屈強な『人間』が集まり、開拓を始めた。

この国には『去る者は追わず来る者は拒まず』というコトワザがあり、少しずつとはいえ新天地を目指して人々が集まってきた。そして、初代『魔王』の座に就いたジンIIシュトロームは、ストラディウス民主主義国として建国を行った。

今では珍しい特産物を大陸の各国に輸出し、他国との交流を深めている。

「うーん。コトワザって?」

「シルベスタ、お勉強してるのね。えらいえらい」

「お兄様!お姉様!」

黒い髪の背の高い男性と、白い髪の美しい女性は、この国の『魔王』と『魔王妃』です。なにかと個性的な人の多い国民みんなから慕われています。カートのおじさんたちのように、優秀な人たちに支えられています。

お姉様に抱かれているアイちゃんの白くて小さな手が、近づけた僕の指を包み込んだ。

「幸せな顔してるな〜」

みんなが家族を大切にしている、そんな平和な国です。

第1話 チートでバグで最強の魔法使いの王

とある魔術師は『魔法』を扱えた。

それは『並行世界の運営』である。

もし、俺の魂がこの世界へ来ることすらしなかったのなら、ソニヤが忌み子として殺されていたのなら、オリバーが魔に完全に吞まれていたのなら、いろいろなifが重なれば『魔人』の未来はどうなっていたのだろう。そもそも、魔法がない世界だったかもしれない。

世界は無数の事象によって変化を続けている。その全てを理解できるのはもはや神の領域だろう。たった1つの事象Aすらも無数に分岐しているのだから、今この瞬間に『日本』だって無数にある。『チートでバグで最強』の身体を持っていても、並行世界の『移動』ですら、頭が凡人である俺には容易なことではない。

つまり、俺が元いた日本までたどり着くのは、至難の業である。

「これは……?」

世界を渡るほどの莫大な魔力と崇高な魔術式を感じ取り、それをイメージ領域に手繰り寄せた。雪のように輝く白い髪の女性と手を繋いで彼女の魔力を借りる。ありのままに転写するだけで、魔力を大量に吸われていく感覚だ。

魔術式の陣は綺麗な円をかたどって、輝いた。

俺からすれば、意味不明な紋様である。

もちろん、理解なんてできない。

——求めるは、出口ではなく入り口

今となつては懐かしい街並みがうつすらと浮かぶ。

入り口の『日本』を、少しでもこの頭に焼き付けようとする。

高速で回転し、やがてその色は鈍る。

「やばい……」

「えっ、うそっ!?!」

向こうでイレギュラーな事態があつたようだ。

「願わくば、平和な世界がいいな……」

その呟きと、『いつてきます』の伝言を残す。

「はあー」

見渡す限り、大草原。

ビル群など全く見受けられず、異世界転移の失敗を知る。

「どうしよう……」

俺とソニヤは青空を見上げて、途方に暮れた。

魔力をかなり消費していて疲労感も大きい。

義理の父親と母親から並行世界転移については注意するように言われていた。イメージによって事象を引き起こせるという、日本人からすれば敷居の低い魔法を俺は使える。例えば、異空間収納という空間や時空に対して干渉だってできる。だがしかし魔術から派生した魔法とは根本的に違って、まだまだ1つの魔法について究めるという研鑽はしたことがない。

つまり、きつかけを掴んだだけであつて、ランダム並行世界転移である。そこまでしてどうして決行したのかと問われれば、親に会って元気で生きていると伝えたいからだと自信を持って言える。ソニヤのことだつて紹介したい。

いまだ俺は『日本』に未練があるということだ。

リズムミカルな音が聞こえた。

軽快な蹄で地面を蹴つて、巨大な馬が向かってくる。

「馬の魔物？ 勘弁してほしいわ。」

「なんだか、物騒な世界だな。」

手のひらを向けて、魔法を思い描く。

水の槍が黒馬を貫いた。

ヒヒインという声を残してその命を狩られる。

無詠唱魔法は上級技である。

もちろん詠唱魔法も使えるが、環境破壊級の威力だ。

かつて転生者と戦った時には周囲を更地にした。

「……まあ、すぐに帰る必要もないのだし、参考になるような転移陣でも見て帰る?」

「それもそうだな。」

まるでジュラシックパークのような、『秘境』で俺たちは暮らしていた。自分達の住む場所を確保すべく開拓していたら、やがて新天地を求めて多くの人が集まってきたのだ。あの王太子の宣伝らしく、家族以外を失った俺たちに居場所を作らせようとしているようだった。

「……は……?」

「冒険者ギルド。冒険者っていうのは魔物ハンターや傭兵みたいなもので、ここギルドはその管理組織の1つだな。」

町にたどり着いて、まず訪れたのは木造の建物。

併設されている酒場は昼間から賑わいを見せていた。

「ふーん。それで、何か用があるの?」

「1つ、依頼をこなせばこの世界の金が手に入る。2つ、この世界の情報について知ることができる。3つ、夕食のことを考えて。」

「……あっちの騒がしいところで食べるの?」

「まあ、この世界の食べ物について何もわからないしな。」

黒髪黒目で、日本人というあまり見かけない顔立ちの俺を見てくる人がいる。それよりも、気品のある美少女を見て頬を赤らめる男冒険者が多い。どこかの貴族のような、近づきがたい印象で、依頼人かと首を傾げる冒険者もいる。

「初めて見る顔ですね。何か御用ですか?」

「はい。」

20代半ばの女性はいわゆる美人である。

ロングの金髪はよく似合っている。

「ジン……?」

ソニヤに脇腹を抓られているので会話を任せる。

「冒険者という職に就きたいの。」

「……依頼ではなく？」

「そうよ。どうすればいいのかしら？」

「分かりました。それでは、こちらにお名前、年齢、種族、それとメイソンとなる武器の記入をお願いします。」

手渡された紙はもちろん現代日本ほど上質なものではない。しかし魔術が発達しているのか日常で使うには問題がない程度である。それよりも驚くべき点がある。もちろん日本語というわけではないが、俺やソニヤが読める字なのだ。

つまり、この世界はソニヤの生まれた世界に近い位置にあるのかもしれない。大きな分岐点は、魔術が発達したか魔法が発達したかである。魔術を知ることができれば、より高精度な並行世界転移が可能となるだろう。

「あ、あのー？」

「すみません、書きますね。」

名前、年齢、種族、そしてメインとなる武器の記入か。

武器については魔道具って書けばいいか。

「それでは、次に冒険者ギルドの説明をさせて頂きます。」

手慣れているのか、紙を渡した瞬間に記入漏れがないかを確認し、そしてこちらへ笑顔で対応する。

「冒険者ギルドは、その名の通り、冒険者の方向けの依頼を、適切な冒険者に斡旋する場所です。冒険者の方の殆どはギルドに登録していて、ギルドを通して依頼を受けています。それには、依頼人とのトラブルなどを未然に防ぐ等様々な理由があります。つまり、冒険者の管理を行っており、依頼人との仲介役を担っております。」

「なかなか面白いわね、ギルドって。」

「説明を続けますね。冒険者ランクは、お二人はFからになります。Fランクで受けられる依頼は、主に街中での雑用です。戦闘はありませんが、中には力仕事もありますので、一般の方ではこなすのが難しい仕事も確かに存在します。」

力仕事なら得意である。

しかし、最初から魔物討伐依頼は受けられないらしい。

魔物ハンターという職業でなくても、魔物を狩ることで稼げたのだから、ソニヤにとつては違和感である。そもそも、魔物に立ち向かうということは命を懸けるのだから自己責任である。まあ、サポートに厚いと思っておこう。

手渡されたルールブックを『異空間収納』へしまおう。

受付嬢は軽く目をこすった。

「そ、それでは、続いて魔力の測定を行いますね。」

受付嬢に促されて、個室の中へ入る。

室内の真ん中には台座に据えられた水晶玉が置いてある。

俺たちは、未知の魔道具に対して興味津々である。

「方法は至って簡単です。その水晶に、左右どちらの手でも構わないので触れてください」

「それだけ？」

「はい。ではどうぞ。」

「じゃあ、私からやってみるわ。」

淡く光るだけだ。

受付嬢はポカーンと口を開けている。

「別に、魔力量を測定するわけじゃないんだな。」

「そうね。でもお姉さんはどうしたのかしら？」

「色が……出ないんですよ。」

対象者の魔力の有無と、どの属性の魔術に適正があるかを調べる魔道具である。魔力を持つ者は誰もが何かしらの属性に適正があるという。赤なら火、緑なら風、黄色なら土、青なら水という4つの属性があるらしい。

(4つだけ……)

俺たちは気まずそうに頬を掻いた。

「もしかして、『ユニーク・マジシャン』なのでしょうか。あーでも、そんなに続けて現れるのかしら……」

「俺たちみたいな非常識、他にもいたのか？」

「えっ、ええ。4属性の女の子と、『ユニーク・マジシャン』の可能性がある男の子がこの前来たの。」

「へえ」

「どうやら、迷いこんだ奴らがこの世界にもいるようだ。」